

TOEFL-ITP と SILL, CAN-DO Lists を用いた 英語学力と学習ストラテジー及び学習意識から見た 一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究 (2017)

A Cross-Sectional Study on the Differences Between General Students
and Returnees in Terms of English Proficiency and Learning Strategies
and Consciousness of Learning Using the TOEFL-ITP, the SILL
and the Eiken CAN-DO Lists
(2017)

木村松雄

Matsuo KIMURA

遠藤健治

Kenji ENDO

I. 研究目的

近年多様化の一途にある学生の背景と学習意識、英語学力、用いる学習ストラテジーの関係を入学前に海外生活体験をもつ帰国学生と海外生活体験をもたない一般学生の相違点に着目し、これを客観的に捉えることにより、教育改革の中で今後益々重視されるコミュニケーション能力の育成を通じた生涯学習の源となる「自己教育力」の育成に繋がる大学及び、小学校、中学校、高等学校の英語教育の改善への道を探る。本研究の根底には、学習意識が学習ストラテジーを規定し、その結果が英語学力に影響を及ぼすであろうという仮説があり、海外生活体験をもつ帰国学生と海外生活体験を持たない一般学生との間に如何なる相違があるかを探るものである。どのような意識が、どのような学習ストラテジー使用を促し、その結果どのような特徴をもった学力を形成するかに最大の関心がある。最終的な目標は、日本で育つ学習ストラテジーと海外生活（異文化）体験をしないと育ちにくい学習ストラテジーの相違を明らかにすることとその教育的応用の提案である。

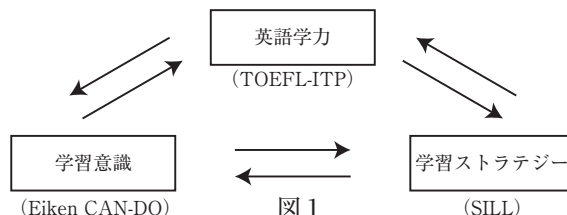


図 1

II. 研究の意義

直接的には、特定の学習集団（入学直後の英米文学科 1 年生）の英語学力（TOEFL-ITP）、学習背景、学習意識（英検 CAN-DO Lists：準 1 級（短大終了時）＋ 1 級（4 年制大学終了時）、用いる学習ストラテジー（SILL：The Strategy Inventory for Language Learning）の相互の関係の把握にある。間接的には、得られた成果が学内外におけるこれからの英語教育の改善・開発の示唆になり得る点と、さらには教育改革下にある小学校、中学校、高等学校、海外の日本人学校、とりわけ、一貫制英語教育構想をもっている全国の小中一貫校、中高一貫校、小中高一貫校へは、国際化、グローバル化の中にあって今後益々その数を増やしつつある異なる背景をもつ学習者の環境と発達に焦点をおいた新たな英語教育を構想する際の示唆となり得る点にあると考えるものである。

III. 第 2 言語習得研究における学習ストラテジーの位置

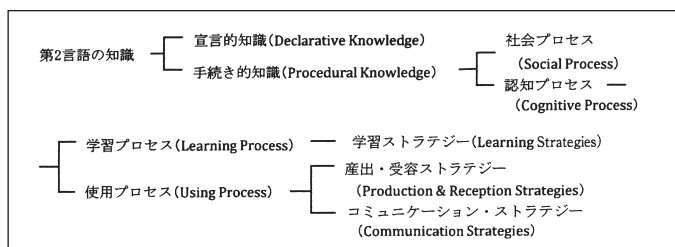


図 2

Faerch and Kasper (1983) においては、第 2 言語習得を目指す学習者には 2 種類の知識があるという。即ち、「宣言的知識 (Declarative Knowledge)」と「手続きの知識 (Procedural Knowledge)」である。「宣言的知識」は、「知る・理解する知識」で、内在化して自分のものにした第 2 言語のルールと記憶された言語チャンクからなる知識である。「手続きの知識」は「使う知識」で、第 2 言語の習得あるいは使用のために、第 2 言語のデータを処理する際に用いるストラテジーやその手順についての知識である。「手続きの知識」は、

さらに「社会プロセス (Social Process)」と「認知プロセス (Cognitive Process)」に枝分かれすると考えられる。「社会プロセス」は、相互交渉の機会を処理する際に、学習者が、第2言語のルールを蓄積し、内在化したりするなどの精神的なプロセスを意味する。さらに、「認知プロセス」は、「学習プロセス (Learning Process)」と「使用プロセス (Using Process)」に分かれる。「学習プロセス」において、学習者は現在の知識と新たなインプットを用いて、新しい第2言語のルールを蓄積し自動化する。「使用プロセス」は、さらに「産出・受容プロセス (Production/Reception Strategies)」と「コミュニケーション・ストラテジー (Communication Strategies)」に分化する。「産出・受容ストラテジー」(Tarone:1981)は、学習者が現在持っている第2言語の知識を有効かつ最小限の努力によって使用するストラテジーをさす。また「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーションを、持続・継続しようとする時に用いるストラテジーであり、補償的な働きをするものであり、時として「補償ストラテジー (Compensation Strategies)」を意味することもある。

さて、学習プロセスを司る「学習ストラテジー (Learning Staretegies)」は、総じて、学習者がどのようにして第2言語の知識を蓄積し、さらに蓄積した規則を、どのように自動化するかに係わる法則と考えられる。よって、「学習ストラテジー」は、使用プロセスを司る「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」とは対照的な存在と言えよう。端的に言えば、「学習ストラテジー」は、第2言語を学習し獲得するためのストラテジーであり、一方「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」は、第2言語を使用するために用いるストラテジーであると言えよう。因みに「学習ストラテジー」は、心理学を基礎に置き、「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーション学に基礎を置いている。どちらも認知プロセスを形成する重要なプロセスであるが、言語の持つ概念やルールを記憶したり、一般化したりすることは、凡そ全て「学習ストラテジー」によって行われるため、教授・学習レベルにおいては、まず「学習ストラテジー」の習得及び開発（特に子供を対象としたストラテジー研究及び開発）が重要な課題であると言えよう。教授・学習レベルにおける基本的な「コミュニケーション・ストラテジー」は、学習内に含まれる実際の場面を想定した様々なタスク（課題）の設定及びシミュレーションにより対応可能と考えられる。

これまでの本研究の成果として、Successful Learners（学習に成功する学習者）が目的に応じて頻繁に使用する間接ストラテジーのひとつである「メタ認知ストラテジー (Metacognitive Strategies)」を英米文学科の学生は海外生活経験の有無に拠らずよく使用することと、さらに英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者の多くは、意識的な学習方法は概して採らず、その結果使用する学習ストラテジーの数も少なくなることが判明している。英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者には、1 - 2年

次の教養課程においても、EGP (English for General Purposes) から ESP (English for Specific/Special Purposes) のとりわけ EAP (English for Academic Purposes) への比重移動が可能になるようなカリキュラムの改革が必要であることと、習得を目標とする第2言語(英語)を「道具(tool)」として用いて、他の教科内容(人文系・社会系・理系)を学ぶ「CLIL (Content and Language Integrated Learning (内容言語統合型学習))」型の学習環境が必要になってきていると考えられる。英米文学科が、2017年度より開始した教科内容を全て英語で行う EMI (English Medium Instructions) の具体策として準備した「PESEプログラム」は、この理念の具現化に他ならない。その実効が待たれるところである。

IV. 研究方法

分析対象は、2017年度に入学した英米文学科学生のうち、下記測定への回答が得られた265名(男性58名、女性207名)。海外生活経験については、その期間が0ヶ月を「なし群」、1～23ヶ月を「短期群」、24ヶ月以上を「長期群」とすると、各群の人数は、なし群男性46名、なし群女性145名、短期群男性2名、短期群女性13名、長期群男性10名、長期群女性49名、計なし群1918名、短期群15名、長期群59名となっている。海外経験者数は2013年度入学生中(短期群と長期群をあわせて)38%の在籍率であったが、2014年度入学生で28%、2015年度入学生で39%、2016年度で25%、2017年度が28%となっている。年度により海外生活経験者の比率が変動しているが、2017年度は短期群(とりわけ男性)が非常に少ない。

従属変数は、英語学力を測定するものとして TOEFL-ITP を実施し、その3つの下位得点(Listening、Structure、Reading) および得点(Total) の4変量を採った。配点は、Listening 68点、Structure 68点、Reading 67点、Total 677点($((\text{Listening} + \text{Structure} + \text{Reading}) \times 10) \div 3$)である。

英語学習のために使用しているストラテジーを測定するためには、木村・遠藤(2010～2016)と同様に Oxford(1990)の開発した SILL の日本語版を一部変更して実施した。ただし日本人の個人学習方法として意識し活用している学習者が極めて少ない「新語を身体で表現して覚える」「その都度計画表などに自分の感情などを書き留める」「英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」「英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る」の4項目を削除した。また幾つかの項目で文言の変更を行った(例えば、「間違いを恐れずに英語を話すよう自分を励ます」→「間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」)。さらに、「特定の日本人の英語の熟達者を意識している」「辞書をよく引く」の2項目を追加した。評価は「全く違う」～「全くその通り」の5段階とした。

大学入学時に「どのような英語技能にどれだけの自信を持っているか」を調査するために、英検 CAN-DO list⁴²項目を用いた。評定は、ストラテジーと同様に「全く違う」～「全くその通り」の5段階とした。また4技能についてどの程度自信を持っているかを「あなたが最も自信のある技能は何ですか」「あなたが最も自信のない技能は何ですか」という設問の下に回答を求めた。選択肢は「聞く」「話す」「読む」「書く」である。この設問は2015年度から設けたものである。

以上の測定は、年度初頭に履修手続きの一環として行った。

V. 結果

1. 英語学力について

まず、全体265名のTOEFL-ITPの得点結果の基礎統計量を求めると、Listeningでは最低点38、最高点68、平均値50.62、標準偏差6.32、歪度0.84、尖度-0.003、Structureでは最低点36、最高点65、平均値50.12、標準偏差5.43、歪度0.03、尖度-.03、Readingでは最低点31、最高点67、平均値50.29、標準偏差5.11、歪度-0.68、尖度1.59、TOTALでは最低点387、最高点667、平均値503.43、標準偏差47.90、歪度0.32、尖度0.09となった。昨年度よりも得点範囲が高得点側にシフトし、ListeningやReadingでは満点も出ている。平均値は500点を超え、全体として英語能力のレベルが例年よりも高い。

4技能への自信について、「あなたが最も自信のある技能は何ですか」に対する回答を集計すると、「聞く」：2015年度34.2%→2016年度27.3%→2017年度26.1%、「話す」：14.2%→16.3%→15.6%、「読む」：29.7%→37.0%→44.0%、「書く」：19.6%→19.3%→14.0%となった。「聞く」が減少傾向にあり、反対に「読む」がかなり増えている。「あなたが最も自信のない技能は何ですか」では、「聞く」：12.0%→17.3%→15.3%、「話す」：47.5%→44.45%→49.0%、「読む」：18.0%→14.1%→15.7%、「書く」：19.6%→22.2%→20.1%であった。一貫して「話す」に対する自信のなさが顕著である。

海外生活期間と性別によって分割した群ごとに、平均得点を求めると表1が得られる。表1の下段は各TOEFL得点を従属変数として、性別×海外生活期間の2要因分散分析を行った結果およびTukeyのWSD検定による多重比較の結果を表記したものである。性差に関しては、Structure以外で男性の方が高得点という結果になった。昨年度は一貫して性差は検出されなかったが、男性が少ない本年度に固有の特徴かもしれない。

海外生活期間に関しては、Reading以外の得点において海外生活期間の主効果が有意であった。Listeningでは海外生活期間の長い群ほど得点が高く、StructureとTotalでは、

なし群および短期群より長期群の得点が高かった。英語学力の成績において、2年以上の長期にわたって海外生活経験を有していることが有効に寄与しているようである。

表1.TOEFL-ITPの結果の基礎統計量と有意差検定

対象		Listening		Structure		Reading		Total	
性別	海外生活期間	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男性	なし群	48.5	4.49	51.5	4.88	51.8	4.30	505.9	36.01
	短期群	59.0	12.73	50.5	6.36	56.0	2.83	551.5	72.83
	長期群	59.1	6.84	53.0	7.79	53.4	6.47	551.7	66.26
	総和	50.7	6.70	51.8	5.43	52.2	4.72	515.4	46.48
女性	なし群	48.6	5.02	48.5	4.96	49.2	4.83	487.8	41.00
	短期群	51.8	5.88	49.8	4.39	48.8	4.39	501.5	38.95
	長期群	56.2	6.20	53.0	5.38	51.7	5.66	536.1	51.31
	総和	50.6	6.23	49.7	5.36	49.8	5.10	500.1	47.87
総和	なし群	48.6	4.89	49.2	5.10	49.8	4.82	492.2	40.51
	短期群	52.7	6.90	49.9	4.42	49.8	4.84	508.2	44.59
	長期群	56.7	6.35	53.0	5.77	51.9	5.78	538.7	53.81
	総和	50.6	6.32	50.1	5.43	50.3	5.11	503.4	47.90
性別の主効果 F(1, 259)		女性<男性 F=4.850, p<.05		性差なし F=.705, ns		女性<男性 F=7.387, p<.01		女性<男性 F=5.103, p<.05	
海外生活期間の主効果 F(2, 259)		なし<短期<長期 F=41.825, p<.001		なし=短期<長期 F=4.566, p<.05		差なし F=2.614, ns		なし=短期<長期 F=16.451, p<.001	

4技能の自信についても海外生活経験の期間ごとに度数をまとめてみると、図3、図4が得られる。

自信がある技能（図3）については、海外生活経験の期間によって分布が異なり（ $\chi^2_{(6)}=36.001$, $p<.001$ ）、残差分析の結果、長期群は「聞く」「話す」が多く、「読む」が少ない。なし群は反対に「聞く」「話す」が少なく、「読む」が多い。海外生活経験が長いほど会話コミュニケーションに自信を持っている者が多い。

自信がない技能の分布（図4）についても海外生活経験の期間で有意差があり（ $\chi^2_{(6)}=36.534$, $p<.001$ ）、残差分析の結果、長期群は「読む」「書く」が多く、「話す」が少ない。なし群では「話す」が多く、「書く」が少ない。海外生活経験の有無により得意不得意が逆転しているようである。

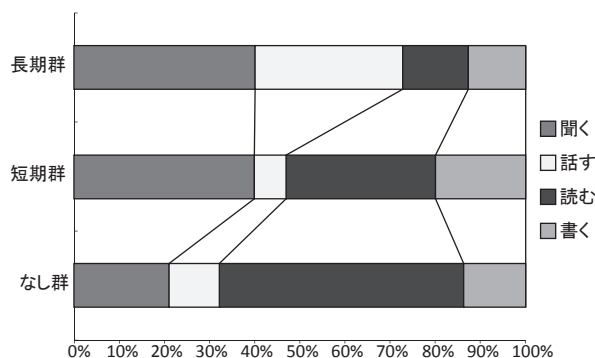


図3.自信のある技能

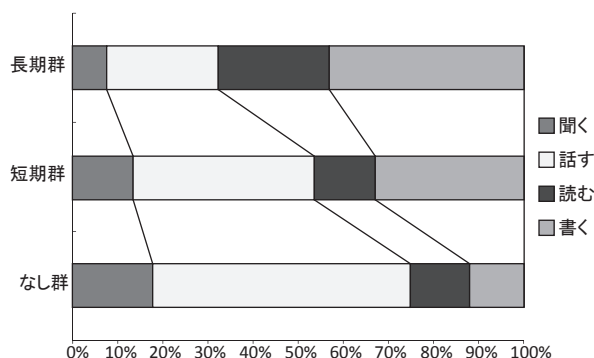


図4.自信のない技能

技能への自信と、実際の TOEFL 得点との関係を見てみると、Listening では、「聞く」に自信を持っている者の平均は 53.97 (標準偏差 6.50)、「話す」に自信を持っている者は 54.93 (6.69)、「読む」に自信を持っている者は 47.83 (4.37)、「書く」に自信を持っている者は 47.61 (4.25) となり、自信を持っている技能により得点は異なっていた ($F_{(3,255)}=31.013$, $p<.001$)、下位検定の結果 (Tukey's WSD)、「聞く」「話す」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に得点が高かった。structure では、「聞く」は 50.72 (5.64)、「話す」は 51.05 (6.30)、「読む」は 49.52 (4.76)、「書く」は 48.47 (5.39) で、 $F_{(3,255)}=2.179$, ns となり、自信を持っている技能によって英語得点変動するわけではなかった。Reading では、「聞く」は 50.75 (5.14)、「話す」は 50.75 (6.26)、「読む」は 49.93 (4.84)、「書く」は 49.50 (4.60) となり、どの技能に自信を持っているかによって TOEFL 得点に有意差は認められなかった ($F_{(3,255)}=.734$, ns)。Total では、「聞く」は 518.09 (49.83)、「話す」は 522.43 (57.68)、「読む」は 490.94 (38.02)、「書く」は 485.19 (41.78) となり、「聞く」「話す」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に得点が高かった ($F_{(3,255)}=9.434$, $p<.001$)。全般的に「話す」に自信を持っている者の得点が最も高く、「書く」に自信を持っている者の得点が最も低い結果となった。

2. ストラテジーの使用について

2-1. 基礎統計量

ストラテジーについては、各回答の「全く違う」を 1 点～「全くその通り」を 5 点と得点化した。測度としては、まず全 52 項目の評定値を求める。次に Oxford の主唱する記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテ

ジー、社会的ストラテジーの6つの方略サブグループの得点を算出する。さらに木村・遠藤(2010)では、同項目の因子分析により7つの学習方略因子を抽出しており、日本人の英語学習を説明するにはOxfordのサブグループよりも適していると考えられるので、これらの7因子の尺度得点を求めた。なお、7つの因子とは、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の項目で因子負荷量が高い“英語を日常場面で使用する”第Ⅰ因子、「優れた英語学習者になるためにどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て英語の学習に十分時間をあてる」「英語の技能を高めるための明確な目標がある」で因子負荷量が高い“自覚的英語学習態度”の第Ⅱ因子、「間違いを恐れず英語を話そう自分を励ます」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう」等で因子負荷量が高い“補償的態度”の第Ⅲ因子、「単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける」「単語が使われる場を心に描いて新語を覚える」で因子負荷量が高い“単語記憶”の第Ⅳ因子、「英語の中にパターンを見つけようとする」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっているか気づく」等で因子負荷量が高い“神経質な英語学習態度”の第Ⅴ因子、「英語で読むのが楽しい」「できるだけ英語で読む機会を探す」で因子負荷量が高い“能動的英語学習態度”の第Ⅵ因子、「英語を読むとき、一語一語調べない」「逐語訳はしないよう心掛ける」で負荷量が高い“概括的理解”の第Ⅶ因子である。また、木村・遠藤(2013)では、海外生活経験の長い者が最も使用する方略群と、最も使用しない方略群が識別された。そこで個人ごとに、前者に属する項目(「覚えやすいように文の中で新語を使う」「新語を身体で表現して覚える」「英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける」「知っている単語をいろいろな文脈で使う」「積極的に英語で会話を始める」「英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る」「英語で読み物を読むのが楽しい」「英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける」「読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける」「間違いを恐れずに英語を話そう心掛ける」「他の人と英語を使う練習をよくする」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「英語で質問をよくする」)の平均値を求め“能動的英語使用態度”得点、後者に属する項目(「授業の復習をよくする」「英語の発音練習をする」「英語の中にパターンを見つけようとする」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「自分の英語学習の進歩について考える」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「辞書をよく引く」「自分で考えた英語ノートを活用す

る」)の平均値を求め“勉強的態度”得点とした。これを7因子の分析と区別して,“二極化した態度”として分析に加えた。

これらの測度についてそれぞれ平均評定値を求めた結果を表2に示す。

表2.SILLの回答結果

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える	3.66	1.10	4	3	-.52	-.33
覚えやすいように文中で新語を使う	3.29	1.10	3	3	-.06	-.78
単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける	3.63	1.17	4	4	-.56	-.60
単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える	3.33	1.19	3	4	-.20	-.93
新語を覚えるときには韻を使う	2.85	1.25	3	2	.16	-.98
新語を覚えるときに単語カードなどを使う	2.44	1.38	2	1	.54	-.98
授業の復習をよくする	3.14	1.12	3	3	.07	-.86
新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく	2.95	1.30	3	3	.10	-1.07
新語は数回書いたり言ったりする	4.11	1.14	5	5	-1.30	.88
英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける	4.17	0.98	4	5	-1.23	1.15
英語の発音練習をする	3.92	1.17	4	5	-.93	-.04
知っている単語をいろいろな文脈で使う	3.39	1.10	3	3	-.23	-.61
積極的に英語で会話を始める	3.09	1.30	3	3	.03	-1.08
英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る	3.77	1.16	4	5	-.65	-.53
英語で読み物を読むのが楽しい	3.59	1.14	4	3	-.34	-.73
英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く	2.96	1.40	3	2	.05	-1.33
英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む	3.10	1.30	3	3	-.04	-1.12
英語の新語に似た語を日本語の中に探す	2.76	1.28	3	3	.22	-.99
英語の中にパターンを見つけようとする	3.44	1.23	4	4	-.50	-.69
難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする	3.60	1.15	4	4	-.54	-.48
逐語訳(一語一語訳)はしないよう心掛ける	3.79	1.11	4	5	-.56	-.53
読んだり聞いたりしたことを英語で要約する	2.76	1.18	3	3	.17	-.84
知らない語を理解しようと推測する	4.12	0.87	4	4	-.79	.10
英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う	4.07	1.04	4	5	-.95	.15
英語を読むとき、一語一語辞書で調べない	3.88	1.08	4	5	-.79	.04
他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける	3.08	1.21	3	3	.03	-.94
英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う	4.43	0.80	5	5	-1.53	2.49
いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける	3.41	1.07	3	3	-.21	-.55
自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する	4.09	0.88	4	5	-.71	.04
他の人が英語を使っているときは、集中して聞く	4.38	0.87	5	5	-1.66	3.03
優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける	3.83	1.05	4	4	-.71	.09
スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる	3.19	1.10	3	3	-.17	-.61
英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける	3.11	1.22	3	3	-.02	-.91
できるだけ英語で読む機会を探す	3.49	1.12	4	3	-.29	-.69
英語の技能を高めるための明確な目標を持っている	3.68	1.14	4	4	-.61	-.40
自分の英語学習の進歩について考える	3.76	1.06	4	4	-.64	-.16
英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける	3.16	1.11	3	3	-.18	-.50
間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける	3.61	1.09	4	4	-.41	-.64
うまくいったとき、自分をほめる	3.44	1.24	4	4	-.39	-.82
英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく	3.17	1.31	3	3	-.19	-1.02
英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらうかたのむ	4.27	0.94	5	5	-1.41	1.80
話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう	3.21	1.31	3	4	-.29	-1.01
他の人と英語を使う練習をよくする	2.76	1.26	3	2	.24	-.97
困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める	3.17	1.27	3	3	-.21	-.96
英語で質問をよくする	2.71	1.22	3	2	.35	-.75
英語話者の文化を学ぶよう心掛ける	3.73	1.08	4	4	-.47	-.64
特定の日本人の英語の熟達者を意識している	3.09	1.32	3	3	-.03	-1.12
辞書をよく引く	3.60	1.12	4	4	-.50	-.42
記憶ストラテジー	3.16	0.66	3.1	3.1	-.29	.58
認知ストラテジー	3.46	0.62	3.5	3.4	-.25	.24
補償ストラテジー	3.91	0.65	4.0	4.2	-.45	.03
メタ認知ストラテジー	3.66	0.75	3.8	3.8	-.48	.06
情意ストラテジー	3.35	0.78	3.5	3.5	-.15	-.38
社会ストラテジー	3.31	0.80	3.3	3.8	.05	-.67
英語を日常場面で使用する	3.14	0.80	3.1	3.1	.03	-.58
自覚的英語学習態度	3.57	0.77	3.6	3.3	-.52	.27
補償的態度	3.42	0.80	3.5	3.0	-.02	-.52
単語記憶	3.27	0.94	3.3	3.3	-.34	-.11
神経質な英語学習態度	3.27	0.84	3.3	3.0	-.24	-.30
能動的英語学習態度	3.54	0.95	3.5	3.0	-.24	-.32
概括的理解	3.84	0.93	4.0	5.0	-.49	-.46
能動的英語使用態度	3.32	0.70	3.3	3.4	.14	-.49
勉強的態度	3.60	0.66	3.7	3.7	-.70	1.06

まず項目ごとの平均値を見ると、平均値が4.00を越えるものが8項目上げられる。「英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ」「知らない語を理解しようと推測する」「新語は数回書いたり言ったりする」「自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する」「英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う」である。このうち「知らない語を理解しようと推測する」「自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する」以外の6項目では[平均値+標準偏差]の値が5.00を越え天井効果が疑われる。平均値は4.00以下だが、「英語の発音練習をする」も[平均値+標準偏差]の値が5.00以上になっており、高得点側に偏った分布をしている。この傾向は前回、前々回報告時と同様で、要するに非常に多くの学生がこの方略を採用しているということである。一方前回までに著しく床効果が疑われていた項目は今回から削除したため、今回床効果が疑われる項目はない。

6つの方略サブグループの得点は、補償ストラテジー（前回3.65→今回3.91）、メタ認知ストラテジー（3.71→3.66）、認知ストラテジー（3.51→3.46）、情意ストラテジー（3.27→3.35）、社会ストラテジー（3.29→3.31）、記憶ストラテジー（3.05→3.16）となった。相対的にはメタ認知や補償、認知がよく使われているが、前はメタ認知が最高値であったが、今回は補償がそれを上回っていたのが特徴的である。社会、情意は前回とほぼ同様の値だが、記憶はやや使用度が高くなっている。

7因子の得点では、“概括的理解（3.78→3.84）”、“自覚的英語学習態度（3.64→3.57）”、“能動的英語学習態度（3.61→3.54）”、“補償的態度（3.34→3.42）”、“神経質な英語学習態度（3.30→3.27）”、“単語記憶（3.18→3.27）”、“英語を日常場面で使用する（3.11→3.14）”の順となった。この順番は前回、前々回と同様で、値そのものの大きな変動は見られない。さらに二極化した態度では、“勉強的態度”が3.63→3.60、“能動的英語使用態度”が3.25→3.32となった。いくぶん差は縮まっているが、英語を“勉強”しようという態度得点が、英語を“使用”しようという態度得点を上回っていることはこれまでと共通した傾向である。

2-2. 海外生活経験とストラテジーの使用

ストラテジー調査の項目ごとに、海外生活経験の期間（なし群、短期群、長期群）×性別（男性、女性）の2要因分散分析を行ったところ（各平均値、標準偏差、 F 値は付表1に示す）、海外生活期間の主効果が48項目中9項目で認められた。しかし下位検定では群間に有意差は検出されなかった。短期群の人数、とりわけ男性の人数が少ないことが影響していると考えられるため、短期群と長期群をまとめて「あり群」と再構成し、海外生活経験の有無（なし群、あり群）×性別（男性、女性）の2要因分散分析を再試行した（付表1の右2列

に結果を示す)。海外生活経験の有無の主効果の有意な項目は14項目あり、その内、あり群がなし群よりも高得点だったのは10項目、なし群の方があり群よりも高得点だったのが4項目であった。前者には「英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける」「積極的に英語で会話を始める」「英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る」「英語で読み物を読むのが楽しい」「英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「他の人が次に英語で何と言うかを推測しよう心掛ける」「間違いを恐れずに英語を話そう心掛ける」「英語で質問をよくする」が該当する。6つの方略サブグループでは認知ストラテジーと補償ストラテジーで有意であった。7因子の得点では「英語を日常場面で使用する」で、二極化した態度では「能動的英語使用態度」でそれぞれあり群の方が多く使用していた。後者には「授業の復習をよくする」「新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく」「スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「辞書をよく引く」が該当した。6つの方略サブグループと7因子の得点ではいずれも有意ではなかった。二極化した態度では「勉強的態度」でなし群の方が多用していた。

性別の主効果についても海外生活経験の有無(なし群、あり群)×性別(男性、女性)の分散分析の結果を見てみると、4項目で有意であった。女性の方が男性よりも多く使用する項目は「新語を覚えるときに単語カードなどを使う」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「辞書をよく引く」の3項目で、これは教室や家庭で女子学生が真面目に勉強している様を彷彿とさせるようなものがあがっている。一方男性の方が多用する項目は「読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」の1項目のみであった。概して、性別は、方略使用に関しては大きな影響要因ではないようである。

2-3. ストラテジーの使用と英語学力

方略の使用がTOEFLの得点を予測しうるかを重回帰分析(ステップワイズ法)によって検討した。サブグループ、7つの因子、二極化した態度ごとに方略使用の得点を説明変数、英語得点Listening得点、Structure得点、Reading得点、Total得点のそれぞれを従属変数とした。

まず6サブグループの得点を説明変数とした場合、①Listeningを目的変数とすると、認知、記憶、メタ認知の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.356$ ($R^2=.117$)、 $p<.001$ となった。標準化 β 係数は認知(.267)、補償(.191)、記憶(-.294)で、認知と補償の β は正だが、記憶は負になっている。また今回はメタ認知の β が負の値でモデルに投入されていたが、今回は除外されている。②Structureを目的変数とした場合は、認知と記憶を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた($R=.246$ 、 $R^2=.053$ 、 $p<.001$)。ただし、決定係数はかなり小さい。 β は認知(.300)、記憶(-.181)で、ここでも β 係数は認

知で小さいながらも正となっている。前回投入されていた情意が今回は記憶に入れ替わっている。③ Reading を目的変数とした場合では、補償 ($\beta = .146$) を説明変数としたモデルが有意であった ($R = .146$, $R^2 = .018$, $p < .05$)。これも決定係数は極めて小さい。今回は認知、情意、メタ認知を説明変数としたモデルが得られたが、今回は説明変数がすっかり入れ替わっている。④ Total を目的変数とした場合、認知、記憶を説明変数としたモデルが有意であった ($R = .287$, $R^2 = .045$, $p < .001$)。 β は認知 (.348)、記憶 (-.233) となった。前回 β が有意であった情意は今回除外されている。Total でも認知の β が正で、他のストラテジーの β は負となっている。4つの得点のうち3つまで、認知が説明変数として投入され、かつ β は正であった。モデルは前回とかなり異なっている面も見られるが、認知ストラテジーを多用するほど各種英語得点が高いと予想されることは共通している。一方、記憶は4つの得点のうち3つまで、 β が負の値としてモデルに組み込まれている。記憶ストラテジーを使用するほど英語得点が低くなることを予測するわけである。

7つの因子得点を説明変数とした分析では、① Listening を目的変数とすると、“英語を日常場面で使用する”、“自覚的英語学習態度”、“神経質な英語学習態度”の得点を説明変数として投入したモデルが生成され、 $R = .526$ ($R^2 = .268$)、 $p < .001$ となった。 β は“英語を日常場面で使用する (.652)”、“自覚的英語学習態度 (-.267)”、“神経質な英語学習態度 (-.233)”となり、“英語を日常場面で使用する”の β は正だが、“自覚的英語学習態度”と“神経質な英語学習態度”は負になっている。② Structure を目的変数とした場合は、“概括的理解”、“神経質な英語学習態度”、“英語を日常場面で使用する”を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた ($R = .318$, $R^2 = .090$, $p < .001$)。 β は“概括的理解 (.186)”、“神経質な英語学習態度 (-.159)”、“英語を日常場面で使用する (.239)”であった。“神経質な英語学習態度”の β はここでも負になっている。③ Reading を目的変数とした場合では、“能動的英語学習態度”のみを説明変数としたモデルが得られた ($R = .251$, $R^2 = .059$, $p < .001$)。 β は .251 である。④ Total を目的変数とした場合、“英語を日常場面で使用する”、“神経質な英語学習態度”、“概括的理解”を説明変数としたモデルが有意であった ($R = .421$, $R^2 = .168$, $p < .001$)。 β は“英語を日常場面で使用する (.382)”、“神経質な英語学習態度 (-.235)”、“概括的理解 (.159)”となった。総合すると、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の“英語を日常で使用する”と「英語を読むとき、一語一語調べない」「逐語訳はしないよう心掛ける」等の“概括的理解”の採用が高いほど英語得点は高くなると予想され、「英語の中にパターンを見つけようとする」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっているか気づく」「英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」等の“神経質な英語学習態度”を採っているほど英語得点は低いと予想する。

二極化された態度では、① Listening を目的変数とした場合、 $R = .541$, $R^2 = .287$, $p < .001$

となり、“能動的英語使用態度”の β は.570、“勉強的態度”の標準化 β 係数は-.382となった。② Structureを目的変数とした場合は、 $R=.306$ 、 $R^2=.087$ 、 $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ($\beta=.333$)”、“勉強的態度 ($\beta=-.176$)”、③ Readingを目的変数とした場合では、 $R=.232$ 、 $R^2=.050$ 、 $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ($\beta=.232$)”のみを投入したモデルが有意であった。④ Totalを目的変数とした場合、 $R=.444$ 、 $R^2=.191$ 、 $p<.001$ 、“能動的英語学習態度 ($\beta=.478$)”、“勉強的態度 ($\beta=-.280$)”となった。すべて“能動的英語使用態度”の β は正、4つの得点のうち3つまで“勉強的態度” β は負であった。英語を“使用”しようとするほど英語得点は高くなると予想され、“勉強”しようとするほど逆説的に英語得点は下がると予測され、これも数年の調査を通して一貫した傾向である。

2-4. 自信のある技能と方略使用

どの技能に自信を持っているかによって、方略を使用する程度に違いがあるかを検討した。まずOxfordのサブグループに関しては、記憶ストラテジーでは平均値は「話す」に自信を持っている者 (3.12)、「書く」に自信を持っている者 (3.17)、「聞く」に自信を持っている者 (3.18)、「読む」に自信を持っている者 (3.19) となり、使用する程度に違いはなかった ($F_{(3,252)}=.099$, ns, $\eta_p^2=.002$)。認知ストラテジーでは「話す」に自信を持っている者 (3.78) が「読む (3.38)」「書く (3.38)」「聞く (3.50)」に自信を持っている者よりも有意に使用程度は高かった ($F_{(3,252)}=4.508$, $p<.01$, $\eta_p^2=.051$)。補償ストラテジーでは「読む (3.74)」「書く (3.83)」「聞く (4.07)」「話す (4.19)」となり全般的にどの技能に自信を持っていても使用程度は高いが、会話コミュニケーション技能に自信を持っている者の方がより多く使用している ($F_{(3,252)}=6.959$, $p<.001$, $\eta_p^2=.077$)。メタ認知ストラテジーでは「読む (3.56)」「聞く (3.65)」「書く (3.72)」「話す (3.94)」となり、これどの技能に自信を持っていてもよく使用されているが、「話す」が「読む」よりも有意に多用している ($F_{(3,252)}=2.687$, $p<.05$, $\eta_p^2=.032$)。情意ストラテジーでは補償ストラテジーでは「読む (3.24)」「書く (3.37)」「聞く (3.43)」「話す (3.45)」となり、どの技能に自信を持っていても使用する程度に違いはなかった ($F_{(3,252)}=1.154$, ns, $\eta_p^2=.014$)。社会ストラテジーは「読む (3.09)」「書く (3.30)」「聞く (3.40)」「話す (3.71)」となり、「話す」が「読む」「聞く」よりも有意に使用している ($F_{(3,252)}=6.698$, $p<.001$, $\eta_p^2=.074$)。

7つの因子では、“英語を日常場面で使用する”で「読む (2.89)」「書く (2.98)」「聞く (3.28)」「話す (3.80)」となり、どの技能に自信を持っているかにより大きく使用程度が異なり ($F_{(3,252)}=16.713$, $p<.001$, $\eta_p^2=.166$)、とりわけ「話す」に自信を持っている者は他の技能に自信を持っている者よりも有意に多く使用している (「聞く」も「読む」よりは多く使用している)。“補償的態度”では「読む (3.21)」「書く (3.33)」「聞く (3.59)」「話す (3.74)」となり、「話す」「聞く」に自信を持っている者は、「読む」に自信を持っている者よりも有

意に平均値が高かった ($F_{(3,252)}=6.265, p<.001, \eta_p^2=.069$)。“能動的英語学習態度”では「書く (3.31)」「聞く (3.51)」「読む (3.55)」「話す (3.90)」となり、「話す」に自信を持っている者は、「書く」に自信を持っている者よりも有意に平均値が高かった ($F_{(3,252)}=2.737, p<.05, \eta_p^2=.032$)。また「読む」に自信を持っている者の平均値は上述した方略の中では常に最下位であったが、この方略に関しては中間に位置し、「書く」との間でも有意差が見られた。他の方略では群間に差はなかった。

二極化された態度では、“能動的英語使用態度”で「読む (3.11)」「書く (3.16)」「聞く (3.43)」「話す (3.90)」となり、4 技能のどれに自信を持っているかにより大きく使用程度が異なり ($F_{(3,252)}=15.597, p<.001, \eta_p^2=.157$)、とりわけ「話す」に自信を持っている者は他より多く使用している(「聞く」も「読む」「書く」よりは多用している)。“勉強的態度”では群間に有意差はなかった(平均値 3.57 ～ 3.72)。

3. 英語学習効力感 (CAN-DO) について

3-1. 海外生活経験と CAN-DO

CAN-DO の設問に対する回答の「全く違う」を 1 点～「全くその通り」を 5 点と得点化し、各項目の平均値を求めた(基礎統計量を表 3 に示す)。4.00 を越える項目は「公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる (4.00)」のみで、昨年同様効力感が高いとは言えない。ある程度の自信があるものとして 3.50 以上の項目を拾うと「交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる (3.88)」「日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど) (3.71)」「自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる (3.71)」「日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる (3.67)」「興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(講演、講義など) 3.54」「観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる (3.53)」「いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる (3.50)」などがあげられる。技能別では Listening 準 1 級 (3.60) と Writing 準 1 級 (3.51) が上記に相当する。3.00 以下には Speaking 1 級 (2.78) と Writing 1 級 (2.96) があげられるが、著しく自信がないという水準でもない。全項目を平均すると 3.20 程度となり、昨年度、一昨年度とほぼ同値である。全般的には「ふつう」よりすこし出来ると自己評価していると概括できる。

得点を従属変数とし、海外生活経験の有無(なし群、あり群)×性別(男性、女性)の各 2 要因分散分析を行った(各平均値、標準偏差、値を付表 2 に示す)。海外生活経験の有無の主効果が 42 項目中 39 項目で認められた(有意でなかったのは「日常生活の身近な話題に

について、自分の考えや意見を書くことができる」「日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる」「社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる」の3項目であった)。有意であった項目では、すべてあり群がなし群よりも効力感が高いという結果である。各項目を Listening 準1級レベル、Listening 1級レベル、Listening Total と技能とレベルでまとめて得点化した結果でも同様に、あり群がなし群よりも有意に高い効力感を示していた。

性別の主効果については、「商品やサービスについて、苦情を言うことができる」「57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる」「英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる」「まとまった量の英文の要点を理解することができる」「商品の取り扱い説明書を理解することができる」「雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる」「資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる」の6項目で有意となった。レベルでは、Reading 準1級と Reading Total で性差が見られた。いずれも、男性の方が女性よりも効力感が高く、一昨年度とは同様、昨年とは正反対の結果となった。2014年のように性差が全く検出されなかったときもあり、性別の効果については結果が安定していない。

表3.CAN-DOの基礎統計量

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる(講演、講義など)	3.54	1.04	4	4	-.23	-.71
テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる	3.44	1.06	3	4	-.21	-.68
観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる	3.53	1.05	4	3	-.34	-.40
公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる	4.00	0.93	4	4	-.66	-.17
交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる	3.88	1.02	4	4	-.58	-.50
自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる	3.22	1.19	3	3	-.02	-.92
幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる(一般教養的な講演や講義など)	3.16	1.05	3	3	.05	-.50
社会的な話題に関する話を理解することができる(環境問題に関する講演など)	3.10	1.06	3	3	.02	-.55
会議に参加して、その内容を理解することができる(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.96	1.12	3	3	.10	-.68
テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる	2.97	1.08	3	3	.11	-.57
いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる	3.50	1.06	3	3	-.19	-.70
調べたことについて、まとまりのある話を行うことができる(課題の発表、プレゼンテーション)	3.13	1.18	3	3	.16	-.80
自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる	2.86	1.13	3	3	.18	-.56
商品やサービスについて、苦情を言うことができる(商品の故障、サービスの内容など)	2.67	1.17	3	2	.35	-.69
公共の施設で簡単な用を足すことができる(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	3.40	1.24	3	3	-.26	-.97
病院などで健康状態を伝えることができる	3.25	1.24	3	3	-.10	-.94
簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる(歯医者や美容院の予約など)	3.38	1.25	3	3	-.22	-1.03
相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けることができる	3.16	1.20	3	3	-.03	-.96
社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる	2.86	1.16	3	3	.09	-.77
会議に参加してやりとりを行うことができる(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.71	1.16	3	3	.24	-.67
幅広い内容について、電話で交渉することができる(予定の変更、値段の交渉など)	2.63	1.28	2	2	.37	-.91
相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けることができる	2.92	1.31	3	3	.06	-1.05
英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる(新聞をざっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しむながら読む)	3.35	1.11	3	3	-.18	-.65
英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる(The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Times など)	3.24	1.05	3	3	-.12	-.54
まとまった量の英文の要点を理解することができる(講義や研修での課題図書や資料など)	3.21	1.09	3	3	.02	-.65
仕事に関する手紙(Eメール)を理解することができる	3.34	1.07	3	3	-.19	-.44
商品の取り扱い説明書を理解することができる(電化製品など)	3.27	1.09	3	3	.03	-.70
雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる(TIME/Newsweek など)	3.22	1.04	3	3	-.05	-.44
文学作品を理解することができる(小説など)	3.22	1.04	3	3	-.11	-.39
資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる(報告書、統計的な資料など)	3.03	1.08	3	3	.12	-.49
留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる	3.02	1.19	3	3	.10	-.84
興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる(簡単なレシピ、器具の使い方など)	3.45	1.02	4	4	-.27	-.48
興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	3.26	1.07	3	3	-.04	-.76
日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる	3.67	0.93	4	4	-.35	-.32
日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる(食べ物、祝日、お祭りなど)	3.71	0.91	4	4	-.38	-.15
自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる(留学の志望動機など)	3.71	0.94	4	4	-.42	-.30
自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる	3.26	1.06	3	3	.08	-.67
社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる(環境問題など)	3.05	1.06	3	3	.05	-.60
自分の行なった調査について、まとまりのある文章を書くことができる(レポート、報告書など)	3.14	0.99	3	3	-.07	-.31
商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる(商品の故障、サービス内容など)	2.80	1.09	3	3	.13	-.54
社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる(社説や論文など)	2.79	1.09	3	2	.20	-.68
講義や会議の要点のメモをとることができる	2.99	1.06	3	3	.22	-.43
Listening 準1級	3.60	0.86	3.67	3.00	-.23	-.40
Listening 1級	3.14	0.95	3.00	3.00	.14	-.51
Listening Total	3.40	0.86	3.36	3.00	-.01	-.47
Speaking 準1級	3.13	1.01	3.00	3.00	-.01	-.81
Speaking 1級	2.78	1.11	2.75	2.00	.23	-.73
Speaking Total	3.00	1.01	2.91	2.27	.09	-.82
Reading 準1級	3.28	0.91	3.20	3.00	-.06	-.23
Reading 1級	3.13	0.93	3.00	3.00	.06	-.11
Reading Total	3.22	0.89	3.11	3.00	.02	-.11
Writing 準1級	3.51	0.82	3.50	3.00	-.08	-.33
Writing 1級	2.96	0.93	3.00	3.00	.13	-.34
Writing Total	3.26	0.84	3.18	3.00	.04	-.32

3-2. CAN-DO と英語学力

技能とレベルごとの得点を説明変数、TOEFL-ITP の Listening 得点、Structure 得点、Reading 得点、Total 得点を従属変数としてステップワイズによる重回帰分析を行った。その結果、① Listening では $R=.567$ 、 $R^2=.314$ 、 $p<.001$ で、説明変数として Speaking 準 1 級（標準化 β 係数 = .244）、Reading 1 級 (.186)、Listening 準 1 級 (.193) を投入したモデルが有意であった。昨年度とは投入された説明変数がまったく入れ替わっている。② Structure では説明変数として Reading 1 級 (.380) のみを投入したモデルが $R=.380$ 、 $R^2=.141$ 、 $p<.001$ で有意であった。これも昨年とは説明変数が異なっている。③ Reading でも $R=.356$ 、 $R^2=.123$ 、 $p<.001$ で、有意なモデルが検出され、モデル式に投入された説明変数は Reading Total (.356) のみであった。④ Total では説明変数として Reading 1 級 (.337)、Listening 準 1 級 (.214) を投入したモデルが $R=.511$ 、 $R^2=.255$ 、 $p<.001$ で、有意であった。昨年度と同様に Listening 準 1 級が説明変数に投入されたが、他は入れ替わっている。全般的に予測モデルに採用された説明変数の数は少なく、かつ昨年度と異なる説明変数が投入されているなど、一貫した結果は得られていない。どの程度できているかによって、どの程度出来ているかを予測できるわけではないようである。

3-3. 自信のある技能と CAN-DO

どの技能に自信を持っているかによって、効力感に違いがあるかを検討したところ、図 5 のような結果が得られた。すべての CAN-DO レベルにおいて、「話す」に自信を持っている者の平均値が高く、 3.73 ± 0.21 近辺に分布している。どの技能についても自己効力感が一貫して高いといえる。逆に、「読む」に自信を持っている者の自己効力感ほとんどのレベルで最低点となっており ($2.93 \pm .26$ 近辺に分布)、効力感が一貫して低い。「聞く」に自信を持っている者の自己効力感間は「話す」に準じて高く ($3.4 \pm .24$)、「書く」に自信を持っている者の自己効力感、ふつう程度 ($3.1 \pm .25$) の分布となっている。

一元配置の分散分析を適用したところすべての CAN-DO レベルで級間変動が有意で ($F_{(3,251)} = 3.055^* \sim 18.817^{***}$)、多重比較の結果、「話す」に自信を持っている者は「読む」「書く」に自信を持っている者よりもすべての技能で有意に効力感が高かった。「話す」に自信を持っているならば Speaking についての効力感が高いのは当然予想されるところであるが、その他の技能についても一貫して効力感が高い。昨年同様、「英語で話せる」ことが、英語ができるという実感の根拠となっているのである。それに対して「読む」に自信を持っている者の効力感の低さも着目すべきところである。「読めても話せなければ、役に立たない」という英語教育への批判は、そのまま学習者へも向けられ、「読めるだけではダメだ」という意識を形成することに寄与している。

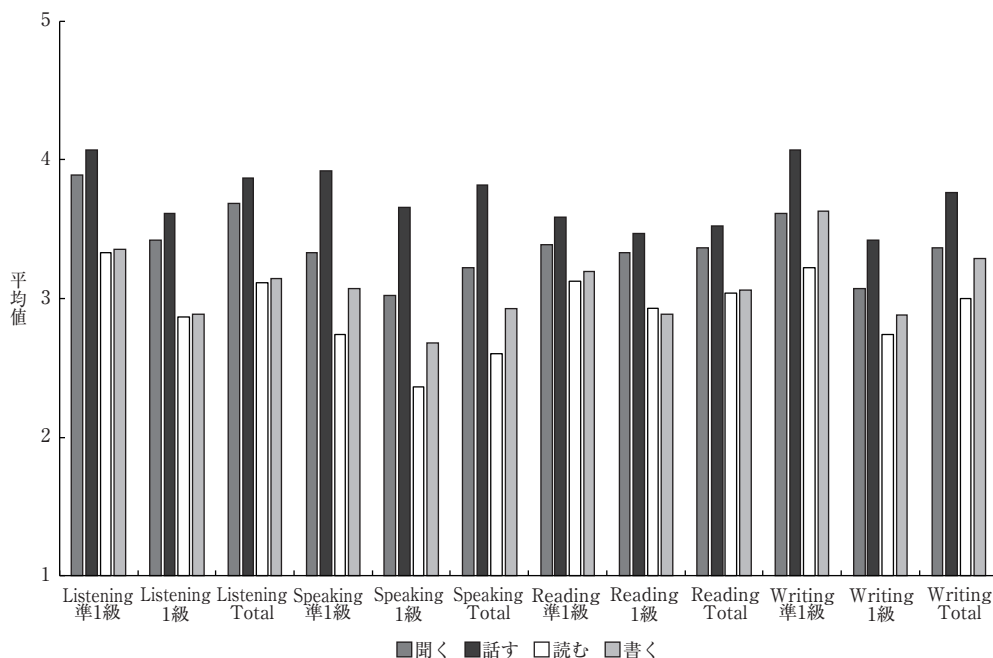


図5. 自信のある技能と自己効力感

4. 英語成績から見た使用方略

Griffiths (2013) は、英語学習の達成度から、使用方略を3つのタイプに分類している。すなわち、初歩の学習者が好んで使用する BASE、達成度に関わりなく多くが使用する CORE、熟達者がより多用する PLUS である。そこで、比較のために（説明変数（独立変数）と目的変数（従属変数）の関係が逆転した視点であるが、本稿でもこの3分類に従って使用方略のリストを作成した。

英語成績による群分割は2種類行った。1つは被調査者の下位10%と上位10%を抽出した群構成である。10%の分割点は、下位10%は440点以下（26名）、上位10%は570点以上（26名）とした。もう一つは、TOEFL-ITPの全国TOP10がおよそ500点以上なので、500点を分割点として、500点未満（128名）と500点以上（137名）の二群分割である。

(1) BASE

まず、上位10%群よりも下位10%群の方が有意に多く使用する項目は

- ・英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく

- 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく

の2項目である。他には、例えば「新語は数回書いたり言ったりする」も下位10%が4.35、上位10%が4.04で、見かけ上では下位10% > 上位10%であるが、有意差は検出されていない。Griffiths (2013) では統計的な検定を適用した上で得点の高低を言及しているのか不明であるが、本稿では、検定により有意差が認められた場合にのみ「得点が高い(低い)」とみなす。従って有意差のない「新語は数回書いたり言ったりする」等はこの群分割ではBASEとしてカウントしない。

500点以上群よりも500点未満群の方が有意に多く使用する項目としては

- 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ
- 新語は数回書いたり言ったりする
- 辞書をよく引く (Oxford にはない項目)
- スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる
- 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく

の5項目があげられる。

Griffiths (2013) のBASE リストでは3.0を下回る(頻繁に使用するとは言えない)項目も含まれていたが、本稿での結果では、そのような項目は含まれていない。しかし「英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ」のように500点未満群が500点以上群より得点が高いとしても、500点以上群も4点以上の高得点で、ともに多用している方略である。一方、「新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく」は下位10%群および500点未満群が3.11～3.15で「ふつう」より少し使う程度で、上位10%群および500点以上群は3.0を下回り、全体得点も3.0以下で、全体としてもよく使う方略であるとは言い難い。これらの項目を“初歩の学習者が好んで使用する”と一括するのには疑問が残る。

(2) CORE

全体が3.5以上の(群間の差は問わない)項目として

- 英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う
- 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く
- 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ
- 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける

- 知らない語を理解しようと推測する
- 新語は数回書いたり言ったりする
- 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する
- 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う
- 英語の発音練習をする
- 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない
- 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける
- 逐語訳（一語一語訳す）はしないよう心掛ける
- 英語のラジオ・テレビ番組 (NHK 等) や英語の映画を見る
- 自分の英語学習の進歩について考える
- 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける
- 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている
- 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える
- 単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける
- 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける
- 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする
- 辞書をよく引く (Oxford にはない項目)
- 英語で読み物を読むのが楽しい

の 22 項目がリストされた。メタ認知ストラテジーと社会ストラテジーに相当する方略が比較的多く含まれているようである。

(3) PLUS

全体が 3.5 未満で、上位 10% 群が下位 10% 群よりも有意に多く (3.5 以上) 使用する項目として

- いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける
- 知っている単語をいろいろな文脈で使う
- 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える
- 積極的に英語で会話を始める
- 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く
- 英語で質問をよくする
- 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する

の 7 項目があげられる。いずれも上位 10% 群が 3.6 ～ 4.0、下位 10% 群が 2.4 ～ 3.4 の得点となっており、群間の得点差が大きく、値そのものからも上位 10% 群がよく使い、下位 10% 群があまり使わないと定義しうる項目が抽出されている。内容的には“英語を日常場面

で使用する”に該当する方略であろう。

全体が3.5未満で、500点以上群が500点未満群よりも有意に多く(3.5以上)使用する項目として

- いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける
- 知っている単語をいろいろな文脈で使う
- 覚えやすいように文の中で新語を使う

の3項目があげられた。認知ストラテジーに相当するものと考えられ、500点未満群も3.0～3.3の得点となっており、これらの方略を使用しないわけではない。また10%の群分割の結果でリストされた7項目中5項目は、500点以上群では3.5には達していなかった。群分割の相違によって、リストされた項目が異なるのは興味深い。

Ⅵ. 課題と提案

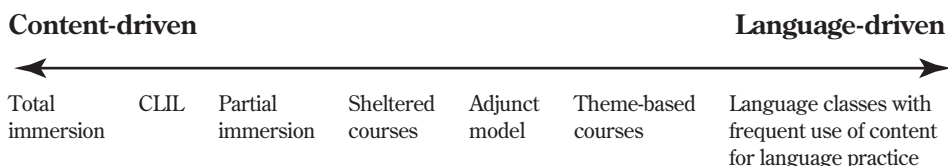
以下の課題及び提案の一部は、青山学院大学文学部『紀要』第55号(2013)、同第56号(2014)、同第57号(2015)及び同59号(2016)において記述した内容と趣旨的に重複する部分があることを初めに記しておきたい。

1. 入学時より英語学力において高い成績を出しながらその後伸び悩む傾向にある上位グループに属する学生(長期海外生活体験者等: 男性: 551.7点(前年比: +10.6)、女性: 536.1点(前年比: -0.1))には、国際レベルにおいて言語能力をさらに向上できるようなカリキュラムの開発、専門領域との連動(文学・語学・言語教育・コミュニケーション)や英語を共通言語として成り立つ専門科目群の創設等、総じて「内容言語統合型学習(CLIL: Content and Language Integrated Learning)」が可能となる言語教育環境が必要になってくるであろう。そこでは、BICS(Basic Interpersonal Communicative Skills)からCALP(Cognitive Academic Language Proficiency)への比重移動が起こるであろう。BICSは、日常生活で人間関係の維持のための、口頭による情報を伝達する際に用いる技能で、特にリスニングとスピーキングがこれを支える。自然な状況で必要な情報を伝えながら言語を習得する場合に育つもので、知能はさほど大きな意味を持たないとされる。一方CALPは、言語構造の知的理解能力を意味する知的・学問的言語能力である。教室内で英語の構造を知的に理解し、規則を適用して言語形式の操作を行い、意味の理解と伝達を主に文字媒体を通して行うため、知能が必要になると言われる。またEGP(English for General Purposes)教育から脱却し、ESP(English for Specific/Special Purposes)、さらにEAP(English for Academic Purposes)教育への

転換が望まれることになるであろう。英米文学科が 2017 年度より導入した「PESE プログラム」の実効が待たれるところである。因みに、本年度の総和の平均は、503.4 点（前年比：+12）は、同時期に TOEFL-ITP を実施した全国の大学（国立・公立・私立）の中で、第 11 位の成績（試算）であった。本研究を通して行った統計分析上、入学時点での Pretest としての最高値である。入学時点においてなぜ急激な上昇を示したかの理由は正式の分析を待たねばならないが、英米文学科が 2017 年度より開始した 4 年間を通して英語で授業・講義を受講できる「PESE プログラム」の影響による英語を得意とする上位学習者群（667 点満点取得者を含む）の比率が増したと下位学習者群（内部進学・指定校推薦）への入学前指導（TOEFL 対策としての自己学習計画指導）等が功を奏した結果と考えられる（詳細は 2017 年度『青山スタンダード論集』を参照）。大学 1 年次入学時において TOEFL-ITP で平均 500 点（667 点満点）以上の大学は僅か 12 大学の学部あるいは学科に限定されるが、その共通特徴は「グローバル化推進大学」として認められた大学と医系大学である。TOEFL で求められる英語能力において、我が英米文学科の学生の大半は、その資質と潜在能力においてそれらの大学の学生と比して勝るとも劣らぬ学習者群であることは事実である。しかし乍ら彼らの英語能力が入学後伸び悩む傾向が続くのであれば、それは学習者要因以上に学習環境要因に問題があることに他ならないことになろう。英米文学科が全国に先駆けて開発し施行した IE (Integrated English Program) の理念は、4 技能の統合が可能となるような CBT (Content-Based Teaching) にある。

一方時代のニーズは、CBT と係わりを持ちながら、Immersion（第 1 言語の使用は基本的に認めない）や CLIL (Content Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習；初期の段階において第 1 言語の使用を認める）に向かっている。さらに、英語は、ELF (English as a Lingua Franca: 共通言語としての英語) としての機能と役割をさらに高める存在になりつつあることから、外国語（英語）教育の目的は、4 技能の習得のみならず第 5 の能力と言われる「異文化間能力 (Intercultural/Crosscultural Competence)」の育成に向かっていると言えよう。よって、改めて、内容重視 (Content-driven) と言語重視 (Language-driven) の関係を見定め、目的に応じた言語教育環境の構築を図る必要があると考える次第である。筆者は昨年 11 月、CLIL に関する調査を行うため、オーストラリアのメルボルン大学大学院を訪問し、CLIL の研究者として名高い二人の研究者にインタビューを行った。Dr. Russell Cross と Dr. Margaret Gearon は、それぞれ 4 言語を駆使して各言語による CLIL 教育を行っている。私が二人に行ったインタビューの中で最も印象的であったのは、以下の図を用いてのものであった。私の “If CLIL is on this line, where is it supposed to be?” の質問に対して、二人は躊躇なく、左極の Total immersion の直右に鉛筆で記しを付けた。そして、「CLIL は内容重視の教授・学習であ

るが、十分な言語（language）の運用能力の育成が前提である」と言われた。初期の段階での第1言語の使用は認めながらも、目標言語の使用率を段階的に上げていき、アウトプットは必ず英語で行うことが肝要と思われる。今後学内外で CLIL の提案と実践が展開される可能性は高いと思われるが、その際、是非このことを生かして頂きたいと思う。



Content-based language teaching: A continuum of content and language integration.

Chapter 28 Content –Based and Immersion Models of Second/Foreign Language Teaching in *Teaching English as a Second or Foreign Language*, p.439.

2.英語習得そのものに自信が持てない（自己効力感が低い）下位グループに属する学生には、その原因の特定を本研究の調査結果とさらなる調査結果を生かして明らかにし、その上で問題解決に繋がる個々の学習者に対する学習支援を系統的且つ経年的に行う必要がある。英米文学科では、2016年度入学生より、指定校推薦合格者と内部進学（高等部）合格者を中心に「入学前英語学習指導」を行っている。入学までの無学習期間（4カ月）を有効に活性化し大学入学後の英語学習に連動する目的で、PretestでTOEFLを実施する関係からTOEFLの問題集（2冊）の指定と英語学習計画の提出と指導を英語教育評価委員（木村・野辺）が行っている。これら一連の「入学前英語学習指導」の効果が実証され、どの学生も「自己効力感」を高めながら主体的に英語学習を進められるようになることを期待したい。さらに昨年度同様の結果（3-3. 自信のある技能とCAN-DO）として、「読む」に自信を持っている者の自己効力感は概して低く、「話す」に自信を持っている者の自己効力感は一貫して高く、英語ができる（使える）という実感は、一方向の「翻訳」ではなく、双方向の「伝達」が可能かどうかによっていることが明らかになっている。単なる技術論ではなく、「伝達」の中に4技能の総合教育と異文化理解教育が可能となるような言語教育環境と教育システムの構築が必要になってきている。2020年よりは大学入試そのものが大きく変わり、英語は4技能の能力を測定する時代に突入する。現在の中学3年生はこの対象となる。英語が好きで、得意であるという意識の高い受験生は、難易度は高くとも4技能を測定する大学（学部・学科）を選択し、基準を超えるスコアを提出することが一般常識化するであろう。当然全国の小学校・中学校・高等学校の英語教育の在り方も大きく変容するであろう。大学における外国語（英語）教育が、BICSの習得に明け暮れるような皮相的なものにならぬよう、BICS（主にL&S）と

CALP（主に R&W）が連動し、さらにその比重移動が「一般領域」から「専門領域」への進行と同調する形で起きるような系統的なカリキュラムの開発が大学院教育を視野に入れながら必要になるであろう。

3. 大学における英語教育プログラムの中に、レベル別に基礎訓練を終えた学生を一定期間（6 か月程度）英語使用国に留学させ、英語運用能力のみならず、第5の能力と言われる「異文化間能力（Intercultural/Crosscultural Competence）」を育成し、「文化相対主義（Culture Relativism: 文化に優劣はないとする普遍思想）UNESCO」への意識を高められるような本来的な外国語教育システムの構築を真剣に検討すべき時期に來ていると考える。英語を専門に学び人生に役だてようとする英米文学科の学生であれば、まず例外なく海外留学を考えるはずであるが、家庭の財政事情等により、夢を果たせない者が数多く存在する。海外生活体験を全く有しない者が今後小・中・高の英語教師になる可能性はほぼないと思われる。大学全体が今後一層グローバル化の方向に向かうことが避けられないなら、セメスター制の完全実施を目前に控えた今こそ、海外の提携大学との単位の互換（Unit Credit System）を視野に入れた、英米文学科の学生に相応しい留学教育システムの検討を開始すべきであろうと考える。
4. 大学教養課程（1－2年次）及び専門課程（3－4年次）における英語教育の到達度を「指標」として設定し、学習者も教授者も、学習・教授を「省察」することにより豊かな言語教育を推進することを可能にするシステムが必要になるであろう。学習が真に活性化するためには、「知識」が「経験」において使用され、さらに一連の学習行為が目標（指標）との関係で「省察」される必要がある。これが共通理解としての「アクティブラーニング（Active Learning）」の解釈である。アクティブラーニング研究の第一人者である溝上慎一氏（京都大学）は、学習の「外化」の重要性を強調している。アクティブラーニングに象徴される学習者中心主義の教育は、「外化」を通しての「課題解決能力の育成」と言えよう。今後は好むと好まざるとに係わらずこの「課題解決能力育成」の世界に AI（人口知能）や AR（拡張現実）が関わってくることは必定である。よって教育、特に外国語教育で重要なことは「指標」としての「目標」があるかないかである。そしてその基準が国際基準に準じていることが、国際化あるいはグローバル化への連動の成否を分けることに繋がるであろう。「グローバル 30」に選ばれた大学の言語政策を分析すると2つの共通点が存在することが分かる。ひとつは、（1）国際基準を参考にした到達度を有している。今ひとつは、（2）独自の英語カリキュラムを有しそれを評価する時に信頼性と妥当性の高い国際版のテストを採用し教育効果測定を行っている、である。2020 年施行の新学習指導要領においても直接言及されている EU が開発した CEFR（Common European Framework of References for Language Learning, Teaching, Assessment）「ヨーロッパ共通言語参照枠」を仮に「指標」として設定した場合、上記

1, 2, 3はその全体枠の中で処理することになる。CEFRの中核理念は、複言語主義(plurilingualism)・複文化主義(pluriculturalism)及び行動中心主義にある。行動中心主義は、言語能力を言語知識としてだけではなく、特定の場面でどのような課題に対処できるかで言語能力を測定判断する立場を取る。CEFRは、言語教育政策全般を包括的に論じているが、とりわけ世界的に注目を集めているのは、言語熟達度を測定するための「共通参照レベル」(Common Reference Levels)であり、A1の基礎段階からC2ビジネスレベルまでの6段階構成になっている。「基礎段階の言語使用者」(レベル:A1-A2)、「自律した言語使用者」(レベル:B1-B2)、「熟達した言語使用者」(レベル:C1-C2)の6段階である。ある調査によると日本の大学生の8割はA1レベルということであるが、英語を専門に学ぶ英米文学科の学生には、教養課程(1-2年次)でB2を、専門課程(3-4年次)でC1を保証するための教育が必要であり、B方式や自己推薦方式(英検1級程度)で入学する高度な英語運用能力を有する学生にはC1-C2を保証するためのシステムや留学制度を含む新たな教育の検討が必要になってきていると考えられる。

5.Griffith(2013)は、英語学習の達成度から、使用方略を3つのタイプに分類している。初歩の学習者が好んで用いるBASE、達成度に関わりなく多くの学習者が使用するCORE、そして熟達者がより多様化するPLUSである。今回の分析で対英米文学科の学生においても一定の分類は可能であることが分かったが、今後この視点からの調査分析を継続して行い、学習者がSuccessful Learners(学習に成功する学習者)に至るプロセスの中で、使用する学習方略に変化が起こるか否かを明らかにしたい。また海外でのデータとの比較により、日本人学習者のBASE、CORE、Plusとの間に相違があるか否かも明らかにしたい。

参考文献

1. Cohen, A.D. and E.Macaro (eds.) 2007. Language Learning Strategies, O.U.P.
2. Council of Europe. 2001. Common European Framework of References for Languages: Learning, Teaching, Assessment, C.U.P.
3. Griffiths, C.(ed.) 2008. Lessons from Good Language Learners, C.U.P.
4. Griffiths, C. 2013. The Strategy Factor in Successful Language Learning, Multilingual Matters.
5. John H.Hawkins and F.Luna (eds.) 2012. Criterial Features in L2 English: Specifying the Reference Levels of the Common European Framework, C.U.P.
6. Marianne Celce-Murcia, D.M.Brinton and M.A. Snow (eds.) 2014. Teaching English as a Second or Foreign Language (4th Edition), National Geographic Learning.
7. O'Malley, J.M. and Chamot, A.U. 1990. Learning Strategies in Second Language Acquisition, C.U.P.
8. Oxford, R., 1989. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know: New York: Newbury House.
9. 溝上慎一、2014、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。
10. 森住 衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内 一（編著）、2010 年、『英語教育学大系第 1 巻大学英語教育学』、大修館書店。
11. 矢野安剛・本名信行・木村松雄・木下正義（編著）、2011 年、『英語教育学大系第 2 巻英語教育政策—世界の英語教育政策論をめぐって』、大修館書店。
12. 吉島 茂・大橋理枝（他訳）・編、2004 年、『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、東京：朝日出版社。
13. 木村松雄（編著）、2011 年、『新版英語科教育法』、学文社。
14. 木村松雄・遠藤健治、2010 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 51 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2009 年）」
15. 木村松雄・遠藤健治、2011 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 52 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2010 年）」
16. 木村松雄・遠藤健治、2012 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 53 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2011 年）」
17. 木村松雄・遠藤健治、2013 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 54 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2012 年）」
18. 木村松雄・遠藤健治、2014 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 55 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2013 年）」
19. 木村松雄・遠藤健治、2015 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 56 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2014 年）」
20. 木村松雄・遠藤健治、2016 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 57 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2015 年）」
21. 木村松雄・遠藤健治、2017 年 3 月、青山学院大学文学部「紀要」第 58 号、「TOEFL-ITP を用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2016 年）」
22. 木村松雄・遠藤健治、2011 年 1 月、「青山スタンダード論集」第 6 号、「TOEFL-ITP, SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2010 年）」
23. 木村松雄・遠藤健治、2012 年 1 月、「青山スタンダード論集」第 7 号、「TOEFL-ITP, SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2011 年）」

24. 木村松雄・遠藤健治、2013年1月、「青山スタンダード論集」第8号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2012年)」
25. 木村松雄・遠藤健治、2014年1月、「青山スタンダード論集」第9号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2013年)」
26. 木村松雄・遠藤健治、2015年1月、「青山スタンダード論集」第10号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2014年)」
27. 木村松雄・遠藤健治、2016年1月、「青山スタンダード論集」第11号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2015年)」
28. 木村松雄・遠藤健治、2017年1月、「青山スタンダード論集」第12号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2016年)」
29. 木村松雄・遠藤健治、2018年1月、「青山スタンダード論集」第13号、「TOEFL-ITP,SILL, 英検 CAN-DO Lists を用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究 (2017年)」(入稿済み)
30. 木村松雄(監修)、2015年5月、『青山学院 4-4-4一貫制英語教育構想』学文社。

付表 1. 海外生活期間と性別ごとの方略得点

項目	群	男性		女性		なし群・短期群・長期群 × 男性・女性		なし群・あり群 × 男性・女性	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	期間の主効果 F(2, 258), p η^2	性別の主効果 F(1, 258), p η^2	期間の主効果 F(1, 258), p η^2	性別の主効果 F(1, 258), p η^2
記憶ストラテジー	なし群	3.16	0.72	3.18	0.67	ns	ns	ns	ns
	短期群	2.56	1.33	3.13	0.45				
	長期群	3.03	0.63	3.16	0.64				
認知ストラテジー	なし群	3.40	0.63	3.41	0.58	ns	ns	4.919*, .019 あり>なし	ns
	短期群	3.11	2.07	3.74	0.55				
	長期群	3.84	0.66	3.55	0.66				
補償ストラテジー	なし群	3.75	0.63	3.90	0.60	3.801*, 0.29 Tukeyでは差なし	ns	6.159*, .023 あり>なし	ns
	短期群	3.90	1.56	3.82	0.55				
	長期群	4.26	0.44	4.08	0.80				
メタ認知ストラテジー	なし群	3.75	0.82	3.63	0.73	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.61	1.96	3.58	0.65				
	長期群	3.64	0.86	3.70	0.69				
情意ストラテジー	なし群	3.26	0.79	3.36	0.77	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.75	0.71	3.52	0.73				
	長期群	3.30	1.18	3.34	0.73				
社会ストラテジー	なし群	3.17	0.83	3.29	0.78	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.00	0.94	3.62	0.90				
	長期群	3.48	1.03	3.40	0.76				
英語を日常場面で使用する	なし群	3.05	0.80	3.04	0.77	4.701**, 0.35 Tukeyでは差なし	ns	5.434**, .033 あり>なし	ns
	短期群	3.00	2.20	3.44	0.77				
	長期群	3.68	0.97	3.34	0.73				
自覚的英語学習態度	なし群	3.64	0.91	3.55	0.75	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.44	1.68	3.50	0.61				
	長期群	3.51	0.82	3.58	0.70				
補償的態度	なし群	3.28	0.82	3.37	0.81	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.75	1.06	3.79	0.79				
	長期群	3.45	0.93	3.56	0.67				
単語記憶	なし群	3.25	0.92	3.28	0.95	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.00	1.89	3.10	1.01				
	長期群	3.33	1.05	3.28	0.87				
神経質な英語学習態度	なし群	3.21	0.81	3.33	0.83	ns	ns	ns	ns
	短期群	2.83	0.24	3.38	0.77				
	長期群	3.23	1.25	3.15	0.87				
能動的英語学習態度	なし群	3.53	0.95	3.49	0.96	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.75	1.77	3.62	1.08				
	長期群	4.15	0.85	3.52	0.92				
概括的理解	なし群	3.84	1.00	3.76	0.93	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.75	1.77	3.77	0.73				
	長期群	4.20	0.71	4.02	0.95				
能動的英語使用態度	なし群	3.26	0.66	3.22	0.68	5.218**, .039 Tukeyでは差なし	ns	4.860**, .038 あり>なし	ns
	短期群	3.34	2.17	3.59	0.74				
	長期群	3.82	0.78	3.51	0.67				
勉強的態度	なし群	3.63	0.73	3.65	0.64	ns	ns	4.172*, .016 なし>あり	ns
	短期群	3.06	1.34	3.62	0.49				
	長期群	3.30	0.76	3.51	0.65				
英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの 関係を考える	なし群	3.73	1.19	3.68	1.07	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.23	1.36				
	長期群	3.78	1.39	3.67	0.95				
覚えやすいように文の中で新語を使う	なし群	3.52	1.09	3.17	1.03	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.00	2.83	3.62	1.12				
	長期群	3.60	1.07	3.29	1.22				
単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや 絵を結びつける	なし群	3.65	1.18	3.63	1.17	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.46	1.27				
	長期群	3.90	1.10	3.56	1.20				
単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える	なし群	3.35	1.16	3.29	1.22	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.00	1.08				
	長期群	3.80	1.32	3.42	1.11				
新語を覚えるときには韻を使う	なし群	2.76	1.23	2.92	1.25	ns	ns	ns	ns
	短期群	2.00	1.41	2.85	1.57				
	長期群	2.30	1.25	2.88	1.18				
新語を覚えるときに単語カードなどを使う	なし群	2.09	1.30	2.48	1.37	ns	7.541**, 0.28 女性>男性	ns	10.628**, .039 女性>男性
	短期群	1.50	0.71	3.23	1.59				
	長期群	1.60	0.84	2.65	1.39				
授業の復習をよくする	なし群	3.24	1.16	3.17	1.12	ns	4.404*, .017 女性>男性	3.990*, .015 なし>あり	ns
	短期群	1.50	0.71	3.15	1.14				
	長期群	2.70	1.16	3.10	1.04				
新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、 標識などの位置を記憶しておく	なし群	3.00	1.30	3.09	1.32	ns	ns	4.046*, .015 なし>あり	ns
	短期群	2.00	0.00	2.54	1.33				
	長期群	2.60	1.35	2.69	1.22				
新語は数回書いたり言ったりする	なし群	3.93	1.08	4.21	1.14	ns	ns	ns	ns
	短期群	4.50	0.71	4.31	1.03				
	長期群	3.70	1.64	4.02	1.16				

英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける	なし群 短期群 長期群	4.00 3.50 5.00	1.07 2.12 0.00	4.06 4.54 4.46	0.96 0.88 0.90	7.237***, .053 Tukeyでは差なし	ns	11.509***, .042 あり>なし	ns
英語の発音練習をする	なし群 短期群 長期群	4.07 3.00 3.50	1.16 2.83 1.58	3.93 4.38 3.77	1.05 0.87 1.40	ns	ns	ns	ns
知っている単語をいろいろな文脈で使う	なし群 短期群 長期群	3.57 3.00 3.40	1.15 2.83 1.26	3.22 3.69 3.67	1.05 1.11 1.04	ns	ns	ns	ns
積極的に英語で会話を始める	なし群 短期群 長期群	3.09 3.00 4.00	1.31 2.83 1.25	2.87 3.46 3.50	1.24 1.20 1.29	4.952***, .037 Tukeyでは差なし	ns	9.061**, .034 あり>なし	ns
英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る	なし群 短期群 長期群	3.48 3.50 4.40	1.30 2.12 1.07	3.79 4.46 3.69	1.11 0.78 1.19	ns	ns	4.067*, .015 あり>なし	ns
英語で読み物を読むのが楽しい	なし群 短期群 長期群	3.30 4.50 4.40	1.05 0.71 0.84	3.61 3.77 3.58	1.14 1.42 1.16	3.857*, .029 Tukeyでは差なし	ns	7.778***, .029 あり>なし	ns
英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く	なし群 短期群 長期群	2.72 3.00 3.60	1.26 2.83 1.71	2.85 3.31 3.31	1.38 1.55 1.39	3.253*, .025 Tukeyでは差なし	ns	36.321*, .024 あり>なし	ns
英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む	なし群 短期群 長期群	3.07 2.00 3.00	1.25 1.41 1.63	3.04 3.85 3.17	1.26 1.07 1.42	ns	ns	ns	ns
英語の新語に似た語を日本語の中に探す	なし群 短期群 長期群	2.58 2.00 3.20	1.14 1.41 1.40	2.73 2.92 2.94	1.29 1.19 1.39	ns	ns	ns	ns
英語の中にパターンを見つけようとする	なし群 短期群 長期群	3.47 3.50 3.70	1.25 2.12 1.06	3.46 3.54 3.31	1.21 1.33 1.31	ns	ns	ns	ns
難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする	なし群 短期群 長期群	3.58 2.00 4.00	1.29 1.41 1.05	3.70 3.46 3.38	1.10 1.13 1.16	ns	ns	ns	ns
逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける	なし群 短期群 長期群	3.93 3.00 3.90	1.05 2.83 1.10	3.72 3.92 3.88	1.07 0.95 1.27	ns	ns	ns	ns
読んだり聞いたりしたことを英語で要約する	なし群 短期群 長期群	2.84 3.00 3.90	1.15 2.83 0.88	2.57 2.77 2.98	1.18 1.30 1.02	ns5.336***, .040 Tukeyでは差なし	ns	9.351***, .035 あり>なし	6.884***, .026 男性>女性
知らない語を理解しようと推測する	なし群 短期群 長期群	4.13 3.50 4.70	1.01 2.12 0.48	4.15 3.69 4.04	0.78 1.03 0.94	ns	ns	ns	ns
英語での会話中、適切な語が思いつかないとき、ジェスチャーを使う	なし群 短期群 長期群	3.82 3.50 4.00	1.13 2.12 0.82	4.12 3.92 4.23	0.98 1.04 1.12	ns	ns	ns	ns
英語を読むとき、一語一語辞書で調べない	なし群 短期群 長期群	3.76 4.50 4.50	1.13 0.71 0.71	3.79 3.58 4.17	1.09 1.24 1.00	3.633*, .028 Tukeyでは差なし	ns	6.724*, .025 あり>なし	ns
他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと思掛ける	なし群 短期群 長期群	2.78 3.00 3.44	1.18 2.83 1.42	2.98 3.31 3.54	1.16 1.03 1.20	4.779*, .026 Tukeyでは差なし	ns	6.294*, .024 あり>なし	ns
英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う	なし群 短期群 長期群	4.24 5.00 4.60	0.86 0.00 0.52	4.46 4.75 4.40	0.75 0.45 0.98	ns	ns	ns	ns
いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける	なし群 短期群 長期群	3.47 3.00 3.70	1.08 2.83 1.34	3.32 3.23 3.65	1.07 1.17 0.89	ns	ns	ns	ns
自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する	なし群 短期群 長期群	4.16 4.50 4.20	0.90 0.71 0.79	4.03 4.23 4.10	0.91 0.83 0.86	ns	ns	ns	ns
他の人が英語を使っているときは、集中して聞く	なし群 短期群 長期群	4.16 3.50 4.00	1.02 2.12 1.15	4.47 4.23 4.50	0.79 0.93 0.80	ns	3.280*, .017	ns	7.301***, .027 女性>男性
優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける	なし群 短期群 長期群	3.84 3.50 3.70	1.15 2.12 1.06	3.79 4.00 3.94	1.07 0.82 0.95	ns	ns	ns	ns
スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる	なし群 短期群 長期群	3.36 3.00 2.50	1.07 2.83 1.51	3.27 2.92 3.00	1.07 0.86 1.07	3.702*, .028 Tukeyでは差なし	ns	7.330***, .028 なし>あり	ns
英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける	なし群 短期群 長期群	3.33 3.00 3.40	1.19 2.83 1.71	2.99 3.15 3.23	1.14 1.21 1.34	ns	ns	ns	ns
できるだけ英語で読む機会を探す	なし群 短期群 長期群	3.82 3.00 3.90	1.03 2.83 1.45	3.38 3.46 3.46	1.11 1.13 1.03	ns	ns	ns	ns
英語の技能を高めるための明確な目標を持っている	なし群 短期群 長期群	3.77 4.50 3.50	1.27 0.71 1.51	3.67 3.54 3.69	1.12 1.05 1.07	ns	ns	ns	ns

自分の英語学習の進歩について考える	なし群	3.87	1.16	3.75	1.03	ns	ns	ns	ns
	短期群	4.50	0.71	3.46	0.78				
	長期群	3.90	1.29	3.73	1.11				
英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける	なし群	3.09	1.08	3.13	1.11	ns	ns	ns	ns
	短期群	4.50	0.71	3.54	1.13				
	長期群	2.80	1.55	3.21	1.03				
間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける	なし群	3.56	1.12	3.49	1.07	ns	ns	4.481*, .017 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.77	1.01				
	長期群	4.10	1.29	3.90	1.04				
うまくいったとき、自分をほめる	なし群	3.20	1.22	3.47	1.20	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.69	1.25				
	長期群	3.50	1.84	3.48	1.22				
英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく	なし群	3.18	1.27	3.34	1.26	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.08	1.44				
	長期群	2.80	1.75	2.77	1.31				
英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらったか	なし群	4.22	1.04	4.34	0.86	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.50	2.12	3.85	1.07				
	長期群	4.70	0.48	4.19	1.02				
話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう	なし群	3.00	1.37	3.22	1.31	ns	4.698*, .018 女性>男性	ns	ns
	短期群	1.50	0.71	3.54	1.13				
	長期群	3.20	1.75	3.35	1.16				
他の人と英語を使う練習をよくする	なし群	2.69	1.28	2.72	1.21	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.00	2.83	3.08	1.32				
	長期群	2.90	1.60	2.83	1.29				
困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める	なし群	3.04	1.28	3.10	1.31	ns	ns	ns	ns
	短期群	4.00	1.41	3.62	1.50				
	長期群	3.20	1.62	3.33	1.00				
英語で質問をよくする	なし群	2.61	1.17	2.58	1.20	ns	ns	4.799*, .018 あり>なし	ns
	短期群	3.00	2.83	3.38	1.19				
	長期群	3.20	1.75	2.88	1.08				
英語話者の文化を学ぼう心掛ける	なし群	3.44	1.10	3.76	1.05	ns	ns	ns	ns
	短期群	3.00	2.83	4.23	1.01				
	長期群	3.70	0.95	3.79	1.11				
特定の日本人の英語の熟達者を意識している	なし群	2.96	1.35	3.19	1.25	ns	ns	ns	ns
	短期群	2.50	2.12	3.38	1.39				
	長期群	3.30	1.49	2.81	1.42				
辞書をよく引く	なし群	3.56	1.14	3.69	1.08	4.084*, .031 Tukeyでは差なし	10.856**, .041 女性>男性	6.513*, .025 なし>あり	6.991**, .026 女性>男性
	短期群	1.50	0.71	3.85	0.80				
	長期群	2.90	1.20	3.50	1.17				

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

付表2. 海外生活期間と英検 CAN-DO 得点

項目	群	男性		女性		なし群・短期群・長期群 × 男性・女性		なし群・あり群 × 男性・女性	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	期間の主効果 F(2, 258), p η^2	性別の主効果 F(1, 258), p η^2	期間の主効果 F(1, 258), p η^2	性別の主効果 F(1, 258), p η^2
Listening 準1級	なし群	3.44	0.76	3.43	0.81	13.623***, .097 長期>なし	ns	23.667***, .084 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.78	0.93				
	長期群	4.45	0.50	4.06	0.82				
Listening 1級	なし群	2.98	0.84	2.95	0.91	9.094***, .080 長期>なし	ns	19.227***, .070 あり>なし	ns
	短期群	3.20	1.70	3.22	0.97				
	長期群	3.96	1.07	3.63	0.89				
Listening Total	なし群	3.25	0.78	3.21	0.81	13.390***, .095 長期>なし・短期	ns	23.210***, .083 あり>なし	ns
	短期群	3.36	1.93	3.52	0.92				
	長期群	4.23	0.68	3.87	0.81				
Speaking 準1級	なし群	2.86	0.90	2.90	0.95	18.861***, .129 長期・短期>なし	ns	36.701***, .125 あり>なし	ns
	短期群	3.57	2.02	3.54	1.17				
	長期群	4.24	0.79	3.70	0.84				
Speaking 1級	なし群	2.42	0.94	2.59	1.03	16.227***, .114 長期>なし・短期	ns	27.958***, .099 あり>なし	ns
	短期群	2.63	2.30	2.96	1.03				
	長期群	3.90	1.33	3.41	1.04				
Speaking Total	なし群	2.70	0.89	2.79	0.94	19.157***, .131 長期・短期>なし	ns	35.939***, .123 あり>なし	ns
	短期群	3.23	2.12	3.33	1.09				
	長期群	4.12	0.97	3.60	0.88				
Reading 準1級	なし群	3.35	0.94	3.10	0.86	7.035**, .053 Tukeyでは差なし	ns	14.043***, .052 あり>なし	8.738**, .033 男性>女性
	短期群	3.80	0.57	3.52	0.63				
	長期群	4.24	0.85	3.46	0.95				
Reading 1級	なし群	3.07	0.89	2.95	0.90	8.483***, .063 長期>なし	ns	16.977***, .062 あり>なし	ns
	短期群	3.88	1.59	3.35	0.68				
	長期群	3.95	1.12	3.44	0.88				
Reading Total	なし群	3.23	0.88	3.04	0.85	8.059***, .060 Tukeyでは差なし	ns	16.141***, .060 あり>なし	6.575*, .025 男性>女性
	短期群	3.83	1.02	3.44	0.60				
	長期群	4.11	0.96	3.45	0.90				
Writing 準1級	なし群	3.30	0.65	3.44	0.82	6.373**, .048 Tukeyでは差なし	ns	11.383***, .043 あり>なし	ns
	短期群	3.33	1.89	3.71	0.91				
	長期群	4.10	0.70	3.76	0.84				
Writing 1級	なし群	2.93	0.83	2.83	0.89	4.727**, .036 Tukeyでは差なし	ns	7.926**, .030 あり>なし	ns
	短期群	2.80	1.98	3.09	0.88				
	長期群	3.66	1.09	3.20	1.00				
Writing Total	なし群	3.13	0.70	3.16	0.82	6.148**, .047 Tukeyでは差なし	ns	10.675***, .040 あり>なし	ns
	短期群	3.09	1.93	3.43	0.86				
	長期群	3.90	0.86	3.51	0.88				
興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる(講演、講義など)	なし群	3.36	0.99	3.47	1.02	5.893**, .044 Tukeyでは差なし	ns	9.246**, .035 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.38	1.26				
	長期群	4.40	0.84	3.79	0.99				
テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる	なし群	3.20	1.05	3.30	1.03	8.586***, .063 長期>なし	ns	15.674***, .057 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.62	1.12				
	長期群	4.30	0.95	3.85	0.97				
観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる	なし群	3.52	0.95	3.30	1.01	5.647**, .042 長期>なし	ns	10.407**, .039 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.85	0.99				
	長期群	4.10	1.37	4.04	0.99				
公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる	なし群	3.67	0.87	3.87	0.94	10.915***, .079 長期>なし	ns	16.507***, .067 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	4.31	0.85				
	長期群	4.70	0.48	4.46	0.77				
交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる	なし群	3.77	0.92	3.69	1.02	8.520***, .063 長期>なし	ns	13.817***, .051 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	4.08	1.19				
	長期群	4.70	0.67	4.33	0.88				
自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる	なし群	3.00	1.05	2.94	1.15	16.266***, .114 長期>なし	ns	29.789***, .104 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.46	1.20				
	長期群	4.50	0.71	3.90	1.08				
幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる(一般教養的な講演や講義など)	なし群	3.10	1.03	2.97	1.01	6.209**, .047 長期>なし	ns	11.215***, .042 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.15	0.90				
	長期群	3.80	1.14	3.65	0.98				
社会的な話題に関する話を理解することができる(環境問題に関する講演など)	なし群	3.07	1.01	2.94	1.03	4.436*, .034 Tukeyでは差なし	ns	6.975**, .27 あり>なし	ns
	短期群	3.00	1.41	3.08	1.04				
	長期群	3.70	1.57	3.51	0.95				
会議に参加して、その内容を理解することができる(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.79	0.94	2.73	1.07	9.340***, .069 長期>なし	ns	16.313***, .060 あり>なし	ns
	短期群	3.00	1.41	3.08	1.04				
	長期群	3.70	1.42	3.62	1.09				
テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる	なし群	2.81	1.07	2.78	1.03	12.081***, .087 長期>なし・短期	ns	20.435***, .074 あり>なし	ns
	短期群	3.00	1.41	3.00	0.91				
	長期群	4.10	1.10	3.47	1.02				
いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる	なし群	3.12	0.93	3.38	1.05	12.293***, .089 長期>なし	ns	22.667***, .082 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.77	1.30				
	長期群	4.50	0.97	3.96	0.87				
調べたことについて、まとまりのある話をすることができる(課題の発表、プレゼンテーション)	なし群	2.74	1.05	3.03	1.11	7.620***, .057 Tukeyでは差なし	ns	14.199***, .053 あり>なし	ns
	短期群	3.00	2.83	3.46	1.27				
	長期群	4.00	1.41	3.51	1.21				
自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる	なし群	2.72	1.12	2.64	1.06	11.228***, .082 長期・短期>なし	ns	22.484***, .081 あり>なし	ns
	短期群	3.50	2.12	3.31	1.25				
	長期群	4.00	1.05	3.28	1.02				

商品やサービスについて、苦情を言うことができる（商品の故障、サービスの内容など）	なし群 短期群 長期群	2.51 3.50 4.20	1.01 2.12 0.92	2.40 3.15 3.15	1.08 1.21 1.16	17.536***, .122 長期・短期>なし	ns	34.879***, .120 あり>なし	7.045***, .027 男性>女性
公共の施設で簡単な用を足すことができる（外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど）	なし群 短期群 長期群	3.21 3.50 4.40	1.21 2.12 0.70	3.13 3.77 4.09	1.21 1.42 1.04	11.039***, .080 長期>なし	ns	20.462***, .074 あり>なし	ns
病院などで健康状態を伝えることができる	なし群 短期群 長期群	2.95 3.50 4.40	1.05 2.12 0.84	3.01 3.54 3.94	1.24 1.33 1.03	13.851***, .099 長期>なし	ns	25.704***, .092 あり>なし	ns
簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる（歯医者や美容院の予約など）	なし群 短期群 長期群	3.12 3.50 4.60	1.16 2.12 0.70	3.08 3.92 4.13	1.22 1.19 1.03	15.810***, .111 長期・短期>なし	ns	29.875***, .105 あり>なし	ns
読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べるができる	なし群 短期群 長期群	2.74 4.50 4.10	1.05 0.71 0.99	2.97 3.62 3.74	1.22 1.04 1.01	14.056***, .100 長期・短期>なし	ns	28.044***, .099 あり>なし	ns
社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる	なし群 短期群 長期群	2.63 3.00 3.80	1.00 2.83 1.40	2.71 3.00 3.32	1.13 1.08 1.12	8.316***, .062 長期>なし	ns	15.112***, .056 あり>なし	ns
会議に参加してやりとりをすることができる（イベントの打合せ、ミーティングなど）	なし群 短期群 長期群	2.37 2.50 3.70	1.07 2.12 1.42	2.55 2.85 3.28	1.06 1.21 1.17	11.263***, .082 長期>なし	ns	19.153***, .070 あり>なし	ns
幅広い内容について、電話で交渉することができる（予定の変更、値段の交渉など）	なし群 短期群 長期群	2.30 2.50 3.80	1.08 2.12 1.40	2.38 2.77 3.40	1.22 1.09 1.21	14.542***, .103 長期>なし・短期	ns	24.713***, .088 あり>なし	ns
相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けすることができる	なし群 短期群 長期群	2.40 2.50 4.30	1.03 2.12 1.34	2.72 3.23 3.66	1.27 1.17 1.22	17.816***, .123 長期>なし	ns	30.441***, .107 あり>なし	ns
英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる（新聞をさっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しみながら読む）	なし群 短期群 長期群	3.30 2.50 4.40	1.08 2.12 0.84	3.23 3.54 3.51	1.11 0.78 1.14	5.630***, .043 Tukey では差なし	ns	7.199***, .028 あり>なし	ns
英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる（The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Times など）	なし群 短期群 長期群	3.33 4.00 4.10	1.15 0.00 0.88	3.09 3.69 3.30	1.02 0.95 1.04	3.861*, .030 Tukey では差なし	ns	7.897***, .030 あり>なし	6.255*, .024 男性>女性
まとまった量の英文の要点を理解することができる（講義や研修での課題図書や資料など）	なし群 短期群 長期群	3.47 4.00 4.20	1.10 0.00 0.92	3.01 3.23 3.32	1.05 0.83 1.14	3.400*, .026 Tukey では差なし	5.401*, .021 男性>女性	6.722*, .026 あり>なし	11.969***, .045 男性>女性
仕事に関する手紙（Eメール）を理解することができる	なし群 短期群 長期群	3.33 4.00 4.10	1.04 0.00 1.20	3.16 3.62 3.62	1.06 0.96 1.05	5.085***, .039 Tukey では差なし	ns	10.283***, .039 あり>なし	ns
商品の取り扱い説明書を理解することができる（電化製品など）	なし群 短期群 長期群	3.36 4.50 4.40	0.96 0.71 1.07	3.02 3.54 3.57	1.04 0.97 1.16	9.030***, .067 長期・短期>なし	5.661*, .022 男性>女性	18.174***, .067 あり>なし	9.924***, .038 男性>女性
雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる（TIME/Newsweek など）	なし群 短期群 長期群	3.30 4.50 4.20	0.99 0.71 0.92	3.03 3.31 3.43	1.05 0.85 0.95	6.632***, .050 Tukey では差なし	6.753***, .026	13.184***, .049 あり>なし	9.570***, .036 男性>女性
文学作品を理解することができる（小説など）	なし群 短期群 長期群	2.86 3.50 3.60	0.94 2.12 1.43	3.17 3.46 3.53	1.03 0.88 0.97	4.218*, .032 Tukey では差なし	ns	8.438***, .032 あり>なし	ns
資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる（報告書、統計的な資料など）	なし群 短期群 長期群	3.19 4.50 4.10	1.05 0.71 1.10	2.78 3.15 3.32	1.04 0.90 1.02	7.982***, .060 Tukey では差なし	8.197***, .032 男性>女性	15.799***, .059 あり>なし	11.919***, .045 男性>女性
留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる	なし群 短期群 長期群	2.93 3.00 3.90	1.10 2.83 1.37	2.78 3.46 3.49	1.13 0.66 1.25	7.122***, .054 長期>なし	ns	13.475***, .050 あり>なし	ns
興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる（簡単なレシビ、器具の使い方など）	なし群 短期群 長期群	3.24 3.00 4.40	0.79 2.83 0.52	3.31 3.54 3.87	1.03 1.13 0.99	10.088***, .075 長期>なし	ns	15.551***, .058 あり>なし	ns
興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる（講義の内容、雑誌や新聞の記事など）	なし群 短期群 長期群	3.12 3.50 3.90	0.88 2.12 1.10	3.15 3.46 3.53	1.09 1.13 1.08	4.150*, .032 Tukey では差なし	ns	8.083***, .031 あり>なし	ns
日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる	なし群 短期群 長期群	3.55 3.50 4.00	0.71 2.12 1.05	3.62 3.77 3.87	0.93 1.09 1.01	ns	ns	ns	ns
日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる（食べ物、祝日、お祭りなど）	なし群 短期群 長期群	3.51 3.00 3.90	0.70 1.41 0.99	3.71 3.85 3.87	0.93 1.14 0.90	ns	ns	ns	ns
自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる（留学の志望動機など）	なし群 短期群 長期群	3.40 4.50 4.20	0.90 0.71 0.92	3.71 3.92 3.77	0.92 1.04 0.98	4.042*, .031 Tukey では差なし	ns	7.878***, .030 あり>なし	ns
自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる	なし群 短期群 長期群	2.98 2.50 4.20	0.89 2.12 1.03	3.13 3.69 3.63	1.07 0.95 1.00	9.378***, .070 長期>なし	ns	15.311***, .057 あり>なし	ns
社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる（環境問題など）	なし群 短期群 長期群	3.07 3.00 3.60	1.06 1.41 1.26	2.97 3.08 3.20	1.05 1.04 1.02	ns	ns	ns	ns
自分の行った調査について、まとまりのある文章を書くことができる（レポート、報告書など）	なし群 短期群 長期群	3.00 3.00 3.80	0.93 1.41 1.32	3.08 3.23 3.30	0.97 0.93 1.01	3.577*, .028 Tukey では差なし	ns	6.099*, .024 あり>なし	ns

商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる（商品の故障、サービス内容など）	なし群	2.79	0.89	2.58	1.05	6.337**、.048 長期>なし	ns	10.986***、.042 あり>なし	ns
	短期群	2.50	2.12	3.15	0.99				
	長期群	3.60	1.17	3.24	1.18				
社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる（社説や論文など）	なし群	2.88	1.00	2.63	1.07	ns	ns	4.262*、.017 あり>なし	ns
	短期群	2.50	2.12	3.15	0.99				
	長期群	3.50	1.08	2.93	1.14				
講義や会議の要点のメモをとることができる	なし群	2.91	0.92	2.88	1.03	5.109**、.039 Tukeyでは差なし	ns	7.959**、.031 あり>なし	ns
	短期群	3.00	2.83	2.85	0.90				
	長期群	3.80	1.14	3.29	1.14				

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

付表3. 英語成績と使用方略

使用方略	全体	英語成績による群分割				英語成績による群分割			
		下位10%	上位10%	F(1, 50)	有意確率	500点未満	500点以上	F(1, 261)	有意確率
英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う	4.43	4.38	4.65	1.569	0.216	4.42	4.44	0.075	0.784
他の人が英語を使っているときは、集中して聞く	4.38	4.27	4.38	0.232	0.632	4.44	4.33	1.041	0.308
英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらったのむ	4.27	4.23	3.88	1.648	0.205	4.42	4.14	5.865	0.016(*)
英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける	4.17	4.08	4.73	12.102	0.001**	4.05	4.29	4.225	0.041*
知らない語を理解しようと推測する	4.12	3.69	4.42	10.244	0.002**	3.98	4.24	5.910	0.016*
新語は数回書いたり言ったりする	4.11	4.35	4.04	1.210	0.277	4.38	3.87	13.574	0.000***
自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する	4.09	3.85	4.19	1.880	0.176	4.06	4.12	0.327	0.568
英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う	4.07	4.27	4.27	0.000	1.000	4.09	4.06	0.047	0.829
英語の発音練習をする	3.92	4.08	3.46	3.143	0.082	4.05	3.80	3.109	0.079
英語を読むとき、一語一語辞書で調べない	3.88	3.54	4.38	12.710	0.001***	3.70	4.04	6.814	0.010**
優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける	3.83	3.81	4.08	0.984	0.326	3.80	3.85	0.147	0.702
逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける	3.79	3.35	4.12	9.042	0.004**	3.75	3.84	0.433	0.511
英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る	3.77	3.38	4.38	11.969	0.001**	3.50	4.02	13.892	0.000***
自分の英語学習の進歩について考える	3.76	3.50	3.96	2.799	0.101	3.72	3.80	0.345	0.557
英語話者の文化を学ぶよう心掛ける	3.73	4.04	3.96	0.071	0.791	3.72	3.73	0.000	0.991
英語の技能を高めるための明確な目標を持っている	3.68	3.65	3.81	0.285	0.596	3.65	3.72	0.265	0.607
英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える	3.66	3.50	3.65	0.264	0.610	3.66	3.66	0.000	0.999
単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける	3.63	3.31	3.38	0.047	0.829	3.68	3.57	0.539	0.463
間違いを恐れずに英語を話そう心掛ける	3.61	3.50	4.08	5.642	0.021*	3.48	3.74	3.616	0.058
難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする	3.60	3.65	3.81	0.296	0.589	3.65	3.57	0.311	0.578
辞書をよく引く	3.60	3.88	3.35	2.758	0.103	3.74	3.46	4.013	0.046(*)
英語で読み物を読むのが楽しい	3.59	3.15	4.23	15.077	0.000***	3.30	3.87	16.965	0.000***
できるだけ英語で読んだ機会を探す	3.49	3.38	3.85	2.687	0.107	3.45	3.53	0.342	0.559
英語の中にパターンを見つけようとする	3.44	3.23	3.08	0.182	0.671	3.55	3.35	1.829	0.177
うまくいったとき、自分をほめる	3.44	3.50	3.38	0.126	0.724	3.43	3.44	0.003	0.958
いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける	3.41	3.38	3.96	5.018	0.030*	3.26	3.56	5.212	0.023*
知っている単語をいろいろな文脈で使う	3.39	3.23	3.88	5.028	0.029*	3.20	3.57	7.390	0.007**
単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える	3.33	2.92	3.73	6.149	0.017*	3.20	3.46	3.189	0.075
覚えやすいように文の中で新語を使う	3.29	3.00	3.38	1.499	0.227	3.06	3.51	11.457	0.001***
話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう	3.21	3.19	3.52	0.954	0.333	3.18	3.23	0.090	0.764
スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる	3.19	3.27	3.08	0.339	0.563	3.35	3.04	5.310	0.022(*)
英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく	3.17	3.54	2.73	7.117	0.010(*)	3.31	3.05	2.513	0.114
困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める	3.17	3.27	3.77	2.330	0.133	3.03	3.30	2.971	0.086
英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける	3.16	3.08	3.58	2.613	0.112	3.06	3.25	2.021	0.156
授業の復習をよくする	3.14	3.19	2.92	0.843	0.363	3.20	3.09	0.606	0.437
英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける	3.11	3.23	3.54	0.917	0.343	3.05	3.18	0.735	0.392
英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む	3.10	3.42	3.04	1.212	0.276	3.13	3.07	0.172	0.678
積極的に英語で会話を始める	3.09	2.77	3.96	18.638	0.000***	2.79	3.38	14.499	0.000***
特定の日本人の英語の熟達者を意識している	3.09	3.15	2.85	0.663	0.419	3.17	3.01	0.854	0.356
他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける	3.08	2.81	3.50	3.967	0.052	2.87	3.27	7.383	0.007**
英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く	2.96	2.48	3.96	18.726	0.000***	2.53	3.37	26.000	0.000***
新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく	2.95	3.15	2.38	5.869	0.019(*)	3.11	2.79	3.896	0.049(*)
新語を覚えるときには韻を使う	2.85	2.96	2.46	2.301	0.136	2.94	2.76	1.479	0.225
英語の新語に似た語を日本語の中に探す	2.76	3.12	2.46	3.190	0.080	2.81	2.72	0.327	0.568
他の人と英語を使う練習をよくする	2.76	2.77	3.27	1.852	0.180	2.56	2.95	6.405	0.012**
誰んだり聞いたりしたことを英語で要約する	2.76	2.46	3.69	19.692	0.000***	2.53	2.97	9.570	0.002**
英語で質問をよくする	2.71	2.62	3.62	9.516	0.003**	2.42	2.98	14.330	0.000***
新語を覚えるときに単語カードなどを使う	2.44	2.88	2.31	2.159	0.148	2.52	2.37	0.760	0.384
補償ストラテジー	3.91	3.74	4.25	9.346	0.004**	3.81	4.01	6.260	0.013*
メタ認知ストラテジー	3.66	3.59	3.87	2.143	0.149	3.64	3.68	0.177	0.675
認知ストラテジー	3.46	3.34	3.77	9.502	0.003**	3.37	3.55	5.324	0.022*
情意ストラテジー	3.35	3.40	3.44	0.038	0.847	3.32	3.37	0.274	0.601
社会ストラテジー	3.31	3.35	3.68	2.227	0.142	3.22	3.39	2.799	0.096
記憶ストラテジー	3.16	3.12	3.03	0.234	0.630	3.17	3.15	0.068	0.794
概括的理解	3.84	3.44	4.25	19.919	0.000***	3.72	3.94	3.581	0.060
自覚的英語学習態度	3.57	3.50	3.73	1.439	0.236	3.54	3.59	0.232	0.631
能動的英語学習態度	3.54	3.27	4.04	12.579	0.001***	3.37	3.70	8.162	0.005**
補償的態度	3.42	3.47	3.85	3.704	0.060	3.32	3.50	3.337	0.069
神経質な英語学習態度	3.27	3.32	3.08	1.080	0.304	3.35	3.20	1.867	0.173
単語記憶	3.27	3.08	3.19	0.173	0.679	3.28	3.26	0.014	0.905
英語を日常場面で使用する	3.14	2.92	3.76	19.962	0.000***	2.92	3.35	20.996	0.000***
勉強的態度	3.60	3.64	3.45	1.071	0.306	3.68	3.53	3.446	0.065
能動的英語使用態度	3.32	3.10	3.91	23.889	0.000***	3.11	3.52	23.621	0.000***